審判を超えた先はダンジョン

日常自販機

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルドガーは無事自らを犠牲にしエルを助けた。

しかしその代償として消滅する。

それを見かねたオリジンとクロノスが善意の押し売りにより別の世界へルドガーを飛ばす

これはルドガーのその後がこんなんだったら面白いなといった好きなキャラと原作を重ね合わせたものである

ルドガーの詳細とＴＯＸ２の内容は一応記入しますが本編（ゲーム）を確認したほうが分かりやすいし面白いですよ

目次

終わりの始まり　1
此処はどこ　8
あるファミリアとその後　16
トマトオムレツ　23
炊き出し　32
炊き出しの後、そして…　39
施設内戦　46
危なかった…　55
現状報告　64
鍛練　70
アストレア様と　76
白髪鬼　80
正義について　85
決戦まで…　93
突撃　99
静寂　105
夢と選択と覚悟　111
違和感　119
間近？　125
骸殻　131
後日談①　137
後日談②　147
原作突入
七年後　155

訓練 161
壁上の訓練 169
やば 182
食事 190
強制任務〜序〜 201

終わりの始まり

ある世界にはクルスニクと呼ばれる一族がいた。
先祖はミラ・クルスニクと呼ばれる者で精霊の主マクスウェルを召喚した者だ。
その召喚の際［証］が必要なのだがミラ・クルスニクは詩を歌った。
その内容は、可憐とは裏腹な［おら、さっさと出てこいよ］［出てこねえと髭抜くぞ］
といった脅しに等しいものだった。
しかし、出てきてくれたら私のマナを全部差し出しても良いという恋歌のような面もある歌だった
その一族の末裔であるルドガー・ウィル・クルスニク
とエル・メル・マータは一族に与えられた試練をクリアするため［カナンの地］と呼ばれる場所におり
だがその二人の風貌は些か変化していた。
ルドガーは全身が黒い鎧で覆われており、エルは身体の半分が黒い何かに侵食されていた。

その時の彼は今から消滅するのにも関わらず笑みを浮かべている
一族には骸殻［ガイカク］と呼ばれる能力が受け継がれている。
その骸殻は凄まじい能力の反面使いすぎると身体が黒く侵食されていきいずれ身体が消滅するという物だ。
そして、それはルドガーとエルも例外ではない。
エルは身体の半分が侵食されているため、もう少しの命だが、それを治すにはルドガーが最後の一人になるしかなかった。
カナンの試練とは［分史世界］と呼ばれる平行世界を潰しながら且つ［道標］と呼ばれる物を回収しそれを５つ確保するのが試練だ。
［分史世界］はクルスニク一族が骸殻を使いすぎによる成れの果てだ。
［道標］を確保するには［クルスニクの槍］と呼ばれる一族の中でも特異な能力を持つ者が必須となる。
その能力は分史世界の物を正史世界に持ち出せるという能力だ。
エルは偶然にもその能力保持者であり、ルドガーはそれに気づかないままエルと共に旅をしていた。
ちなみに、試練には制限つきで全てのタイムファクターが１０００００００を越えた時点で試練終了となる。

そして、現在の数は９９９９９９でありこの人数を過ぎるとタイムファクター化は解除される。
そして、この場にいる一族はルドガーとエルの二人だ。
ルドガーはエルを助けるために自らを犠牲にエルのタイムファクター化を治そうと骸殻を最大限使用している。
「エル約束する！もう嘘つかないし、トマトだって食べる！ルドガーが助けてくれたこと・・スープの味も絶対忘れない！」
本当っ本当だから！と目の前の少女は涙を拭い
その光景を目にし安心したかのように笑みを浮かべ
「ああ。約束だ」
その言葉を最後にルドガーの身体は消滅した
そして、数値が１０００００００に達しエルの症状は綺麗に消えた
この時を持って長い間続いたクルスニク一族の試練もとい呪いに決着がつき
「ありがとう。ルドガー」
エルは自らを救ってくれた相棒に感謝を述べさよならを告げる

「(ああ、これでよかったんだ。)」
身体が消滅したが、今までの事を思い浮かべ満足げに微笑んだ。
エルは分史世界の住人で尚且つ、自分の将来の娘でもある
確かに正史世界には何れ同じエルが生まれるかもしれないがそれでもと、俺は今のエルを選んだ。
「(兄さん。俺守れたよ。ミラ、ありがとな)」
「(まあ、少しの後悔があるとするなら、エルのこの先を見守ってやれないことが残念かな)」
この先の人生はどうなるか全くわからない。もしかしたら俺みたいに借金を背負うかもしれないし、ギャンブラーになるかもしれない。
「(でもまあ、皆がいるから大丈夫か)」
一緒の旅をした仲間を思い浮かべ安堵する。
頭が良く護身術を身に付けている元医療学生であり現研究者のジュード
元傭兵であり、強かな現商人のアルヴィン
学生ではあるが精霊術の使い手エリーゼ
指揮者［コンダクター］の異名を持つ宰相ローエン

元看護婦であり現記者の棍の使い手レイア
遊び人兼他国の王様のガイアス
それぞれが一緒に旅をし戦った仲間達だ。
「(・あのメンバーの他にミラとかミュゼはいるけど精霊だし、使命が終わったら消えるって言ってたから多分もういないだろうな・)」
[あはは]と苦笑するが、よくよく考えれば俺はこれからどうなるんだろうかと気になった。
消滅は確かにしたんだろうが幾らなんでもおかしすぎる。
てっきり思考もなにもできない状態になるんだと思っていたんだがな。
「そうだね。実際はその状態のあとに分史世界になるが正しいね」
「(!?)」
「落ち着いてルドガー。僕だよ。オリジンだ」
「(何でオリジンが此処に!?)」
唐突に全身真っ白な精霊オリジンが目の前に現れた。
「それはね、君に試練を越えた報酬をと思ってね」
「(報酬?)」
「そうだとも、君は自らを犠牲にしエルを助けた。その行いは僕たち精霊にとって人間

を見直す出来事だ。なのでその報酬をね」
まあ善意とは押し売りだとか何処かの奴が言っていたからそれを見習ってね君に僕とクロノスが勝手にやろうってねそういう話になったんだよ
ああ、分史世界になる訳じゃないから安心して。実際は元ある平行世界に君という存在を放り込むだけだから。
その世界は精霊やらダンジョンやら神様やらいるけど実際は君達の世界より分かりやすいと思うよ。そこで素敵な女性を口説いたりハーレム築いたり同性と仲良くしたり色々すれば良いよ。だってほら君そういうの得意じゃん？
「（イヤ。ちょっと待て誰が得意だ。そして何か不穏な言葉が幾つか聞こえたんだが!?）」
大丈夫大丈夫、時間制限有りとはいえ骸殻とか代償無くすし精霊術とか体術とか色々使えるよう調整するし
「（ああそいつはどうも。じゃなくて！）」
あっごめんそろそろ時間だからその世界に放り込むね
行ってらっしゃーい。
「（え、あもう!?）ちょっとまてええ！」
ええええええええええーーー

俺の言葉が最後に木霊し意識がまた消えていった

此処はどこ

「‥‥はっ！あづ！」

意識が回復し上体を起こすと全身に鋭い痛みが走り出し

身体のあちこちを確認すると包帯で巻かれているところが普段よりも多かった。

「‥何でこんな怪我を。あいや待て」

思い返すとカナンの地で戦った時の傷がそのままだとしたらどうだ、クロノスにやられた火傷や切り傷、ビズリーにやられた腹部の打撲傷等をそのままだとしたら納得が行く。

「‥‥此処は何処だ？」

周囲は録に明かりのない洞窟のような場所で光源といったら小さな石が発している光しかない。

「包帯は巻かれてる。てことは誰か居るってことだけど、生き物の気配は感じないな」

「それはそうだろう。私は生き物のカテゴリーには入らないからな」

「!?」

目の前に現れたのは黒いローブに包まれた薄気味の悪い生物であり声も男なのか女

なのか両方が混ざりあっている感じで判断がつかない。
「あんたがこの傷を治したのか？」
その質問にそいつは頷いた。
「ああ、君は唐突にこの安全地帯［セーフティポイント］に現れた。傷については、腹部の打撲、切り傷、火傷は魔法で治せるところは治したが深かったところは治せていない。」
それもそうか。クロノスの技やらビズリーの奥義とかもう二度と喰らいたくないぐらい痛かったし。何だよ［絶拳］って一撃で意識失ったからな。
「さて、意識も回復したところで聴きたいことが山ほどあるんだが
まず君は何者だ何故此処に現れた
その傷は何だ見たところ只の怪我ではないみたいだが
そして何より気になるのが、何故恩恵が刻まれていない此処はダンジョンだ。冒険者は恩恵が刻まれて初めてなるものだが、君にはそれがない。
最初は錠を掛けているのかと思いステイタスシーフを使用したが反応が無かった。つまり君は恩恵が刻まれていない状態でダンジョンにいるわけ何だがどうなんだ」
ここまで一呼吸で言い切った。まさにマシンガントークだった。肯定も質問も一切

許さないように一気に捲し立ててきた。
「お‥おう。えと、そうだなまずは此処にいる経緯なんだけど」
　俺は話した。精霊の押し付けの善意により突然飛ばされそこで幸せ‥?に暮らせと。流石にエレンピオスのことやリーゼマクシア、クロノス、オリジンのことは信じてもらえないだろうから伏せはしたけど。
「‥なるほど。ということは君は此処の住人ではなく突然飛ばされた人間だとそういうことだな?」
「そう‥だな。うん。実際此処がダンジョンって呼ばれてるのも知らなかったし」
「そうか。ではその真偽を確かめるために私に付いてきて欲しい」
「真偽?」
「ああ、正直君の話は本当の事は話しているだろうが隠していることが多々あるようだ。だから、その事についてを確かめるために神に会ってもらう」
　‥本当にいるのか神様はてか何でいるの?
「ちょっと待ってくれ。神に会ってもらうって居るのか?神が?」
「?何を言っている。かなり大昔に降りてきただろう暇潰しと称して天界から」
「暇潰し?」
「本当に知らないのか?下界の人間達と暮らす序でに刺激を求めてやって来たというの

も?」
「・・ああ、全く知らない」
「そうか。君にも色々事情が有るようだな。そう言えば君の名前は?私はフェルズ」
「俺はルドガー。ルドガー・ウィル・クルスニク。よろしくなフェルズ」
握手をしようと右手を差し出すがフェルズは少し戸惑いを見せ手を差し出さなかった。
「どう・・した?」
何か悪いことでもしたかなと若干不安になるが
「イヤ。此方の事情でな握手は神との面会のあとで頼む。君、いや、ルドガーが嫌じゃなければな」
話は此処までだ着いたぞ。とフェルズが足を止め、そこには中央に階段がありその上には椅子に座った白髪の老人がいた
「君が飛ばされたという来訪者か。」
「!?」
俺はこの人?には精霊に飛ばされたとは一言も言っていない。どう言うことだこの世界にもＧＨＳみたいな通信機があるのか?
「落ち着きたまえ。フェルズには私と会話のできる玉を渡しておいた。それを通じて話

を盗み聞きさせて貰った。」
「そういうことだ。すまないなルドガー」
　フェルズが謝罪をしてかなり驚いたが説明が省けるのは助かると思い納得する
「わかった。で‥えーと、神様?は俺に聴きたいことがあるんだっけ?」
　その言葉を聴き神は頷き
「まずは私はウラノス。君に聴きたいのは此処に飛ばした精霊の名。その事情。そして、君の経緯についてだ。」
「一応言っとくが神には嘘はつけないぞ」
　こいつは誤魔化せないな。流石にこの世界で相談相手もいないのでは少々心が狭苦しい。
「‥わかった。降参だ全て話すよ。あと嘘偽りもないからな」
　二人はその言葉に頷き続きを促した。
「そうだな‥じゃあ」

「こんな具合かな?」
　俺はフェルズに言えなかったことを全部さらけ出した。エレンピオスのことやリーゼマクシア。精霊オリジンについてやクロノスについて、試練のことや骸殻のこと。

二人は最初は興味本位が大きかったが精霊術についての時はフェルズが仕切りに「後で詳しい説明を！」と言っていた。

試練の時の話は二人はうつむき仕切りに唸っていた。

「‥成る程な確かにこれは信じられん話ではあるな」

「ああ、精霊オリジンやクロノスとかまず信じられないしその精霊術と魔法の違いとか後で詳しい説明を頼むぞ！ルドガー！」

「わかったから。落ち着いてくれって」

「しかし、これは扱いに困るな。迂闊に変な神の眷属にしてしまえば娯楽の対象となり面倒なことになる」

「‥というか、眷属にする必要あるのか？ウラノス」

「なに？」

「精霊クロノスや様々な怪物ひいてはギガントモンスターやらも倒せる腕前なのだろう？なら無理をして入れる必要は無いのではないか？」

「‥ふむ。それもそうか」

「‥あのさ一ついいかな」

俺は二人の会話に手を上げ割り込む

「俺、此処で料理とか作りたいんだけど‥ダメかな？」

「「料理？」」
　そうだとも、俺は列車事故さえなければ普通に駅前の食堂で働いていたかも知れないんだ。それが痴漢騒ぎやらテロリストやら借金やらでおじゃんになったのだから
　せめて此処では出来なかったことをやりたい
「・了解した。それで手を打とう。但し此方の緊急の案件には手を貸してくれるか？税金については免除してやろう。」
「ああ、それで構わない」
「ではそのように。のちほどギルドに伝えておく。フェルズ出口まで案内してやれ」
「承知した。此方だルドガー」
「わかった。それじゃあなウラノスこれからよろしく」
「ああ」
「それとフェルズもこれからよろしく」
　もう一度右手を出し握手を求める。
「・では君が秘密を明かしてくれたように私も明かそう」
　そう言いフェルズは黒いフードを外した。
「!?」
　その中身は骸骨だった。何の肉もない本当に骨だった

「驚いたか。だが解ったろう握手を求めない理由がな。って何でまだ手を出している」
　いや確かに驚きはしたが
「だって命の恩人でもあるし。秘密を打ち明けたなかだし駄目か？」
「：君は本当に可笑しな人間だな」
　骨だから表情は解らないが言葉の刺は無くなった気がした。
「これからよろしく頼むよルドガー」
「ああ！」
　そんなこんなで俺には秘密を打ち明ける事ができた神と人？が増えた。

あるファミリアとその後

　ある昼下がりのガネーシャファミリア
「ねえねえ！お姉ちゃん！」
「どうした突然」
　そのファミリアでとある青髪の姉妹が仲良さげに話していた。
「最近、オラリオで昼は定食屋。夜ではバーを経営してるお店が出来たんだって！」
「ああ、そういえば主神がよく通ってると聞いたことがあるな。」
「それがさ！うちの主神だけじゃなくて、ヘファイストス様やゴブニュ様、ヘルメス様とか何か色々な神様が通ってるみたいだよ！」
「：何だ。それは？」
　一人や二人ならまだしもそれは流石に人数が多すぎないか？
「何かね、トマトと卵を使った料理とか絶品らしくて他には一風変わった料理とかがあるらしいんだけど、それも癖になる味とかなんとか」
「一風変わった料理？」
「うん。例えば麻婆カレーとかサイダー飯とか」

「・想像がつかんな。見た目ではなく味が」
「でしょ！気になるでしょ！なのでこの後非番だから一緒にどうかなって」
「わかったわかった。どうせＮＯとは言わせないんだろ？」
　あっやっぱりわかった？妹は頭に手をやりながら微笑んだ。
「しかし、この時期に店を出すなど無謀にもほどがあるぞ。治安は大丈夫なのか？」
「それがさ、働いている人は少ないんだけど料理人があり得ないぐらい強いんだって」
「は？」
「と言っても強いのは店主一人だけなんだけどＬＶ３とか簡単に伸しちゃうんだって」
「はっ!?」
　なので行こうと思ったんだよね！わが妹はハニカミながらあり得ないことを口に出した。
　ＬＶ１やＬＶ２のいざこざは多々あることなのだがそれがＬＶ３となると止められるのはそう多くはない。
　それを簡単に止めるとなるとＬＶ４は必要となる。
「ほらほら！早く準備して行こうよ！お姉ちゃん！」
「あ・ああ。今行くよ」
　私は妹に手を引っ張られながらその場を後にしその最近できた定食屋に足を運ぶ。

出来れば噂の真偽を次いでに確かめたいと心に秘めながら

あのあと俺は途中までフェルズに案内され無事に地上に出た
その時の光景と来たら、多種多様な種族、見たことない町並みで只唖然として
――――そういえばジュード、初めてエレンピオスに来たとき何に驚いていいのか分からないことに驚いたとか言っていたが、成る程なこういう事か。
「そう言えばフェルズ、ギルドに向かえとか言ってたっけ？店を出すときは必要になるとか。あと話は通してるってウラノスが」
これを渡せば良いんだよな？とウラノスに渡された紙と印が着いたバッチを確認する
「・・まずいな。文字が読めん」
――――何語だこれ？エレンピオスで使われた文字とも似ても似つかない文字に冷や汗を掻いた。
ヤバイなギルドの場所も解らんぞ。
その時ふと過去の記憶が思い浮かんだ。

『良いかルドガー。もしわからないことがあれば先ず眼鏡を掛けるんだ』
『え、何で。というか突然どうしたの兄さん』
『実はな、昔俺がクランスピア社のエージェントになるときの筆記試験でなどうしても解らないところがあったんだ』
『え、あ・・うん』
『その時、胸ポケットに入れておいた眼鏡を思い出してな。ふと思ったんだ眼鏡を掛ければ解るんじゃないかってな』
『・・その時本当に慌てていたのがわかったよ』
『でな、眼鏡を掛けたら本当に解けたんだよ。どうしても解らないところが』
『んじゃ、それで試験をクリアしたの？』
『いや、その問題間違えても普通にクリアしてたな』
『じゃあなんで今言うのさ』
『もしかしたらルドガーにもどうしても解らない事があるかも知れないだろ？その時の為に眼鏡は持っといた方がいいってことだよ』
『・・解った。わからないけどとりあえずは理解した』

「いやまさかな」

そう思ったが愛しき兄の助言だ。騙されたと思いつつ懐をまさぐる
「‥流石にあの戦いのあとに眼鏡は壊れてるよなっとえーと、‥‥あった。何で?」
まさかと思いながら懐に兄さんの眼鏡が普通にあり、しかも戦いで壊れたというわけではない新品に等しいのが出てきた。
「‥これで文字が読めるようにはならないよな‥‥スチャ
本当に読めるし。まさか他のアイテムも‥‥出てきた」
眼鏡が出てきた時同様に懐からまたもや出てくる
「もしかして、クロノスか?時空を司る精霊だし俺のポケットを魔改造出来るのかもしれないしな」
もうご都合主義満載だがまあ文字が読めるようになったから問題は解決だ。ウラノスが言っていたギルドに向かおう。

「すいませーん」
ギルドに到着した俺は近くの受付嬢らしき人に声をかけた。人も比較的少ないので簡単に対応してくれた
「本日はいかがなさいましたか?」
「実は、話は通してるってこれを渡されたんだけど」

例の紙と印が着いたバッチを受付嬢に渡し

「確認しますね・あー！貴方が店を出したいって言ってた人ですね！はい！話は上から聞いてますよ！場所と内容等は既に承っていますので安心してください。無論それらに掛かる税も免除されてますので安心してください」

ウラノス凄いなあの短時間で此処までするなんて

「それでですね、外装共に内装はゴブニュファミリア

器具はヘファイストスファミリア、その他の調度品等はヘルメスファミリア、そして、何かしらの対処、主に喧嘩ですね。それを対処するのにガネーシャファミリアとアストレアファミリアが協力してくれるみたいなので、それぞれの主神曰く［サービスしてくれよ］とのことです」

「ああ。もちろんＯＫだ」

「では、そのように。お店は半月後に完成予定なのでお待ち下さい」

「半月後？」

「ええ。只今オラリオでは些か治安が良いとは言えずなに事も時間が掛かってしまうのですよ」

成る程な。でも、そしたら店が完成するまで時間が出来てしまう。どうしたものかうーんと悩む俺を見て受付嬢はあっ！と声を出した。

「ルドガーさんは・・・・」
俺はその受付嬢の提案に二つ返事で了承した

トマトオムレツ

ギルドの対応が終わり半月後、俺は冒険者ではなくても受けられるクエストをこなしつつ、ゴブニュ様やヘファイストス様等協力してくれた神様に顔合わせを行いながら過ごしていた。

そして、お店がオープンしたのは良いが人が来ない、人手が足りない等の問題に直面していた。

今は丁度日が真上に来た辺りで普通なら何人かお客さんがいる時間帯だが誰もいない。

「…暇だな」

一応このオラリオの料理とか作れるようになりはした。だが、前の世界の料理に若干の拘りがあるためあまり良い好感度はないみたいだ。

「ああ此処だ、この時期に店を出した物好きの所は」

「成る程、向こうの酒場とは些か風貌が違うな」

その時だ、顔に怪我は残っているが身体を鎧で覆っている男と、銀髪で黒いドレスを着た女性が来たのは。

「はーい。いらっしゃいませ。二名様ですか？」
「ああ、そうだ」
「かしこまりました。それではそこのテーブルでお待ち下さい」
「わかった」
　・・・何というか、雰囲気が違うな。例えるならこうビズリーと初対面の時と同じような・・いやクロノスかな、戦ったら只じゃすまないのがわかる
「えと、ご注文は？」
「・・・」
「あ・・あれ？」
「いや、すまないな。見慣れないものばかりでな。取り敢えずお勧めで頼めるか？」
「私も同じのでいい」
「お勧めとなるとチーズ入りトマトオムレツを作りますね。」
「ではそれで、ああ俺のは大盛りで頼む。」
「かしこまりました。デザートとかは入らないですか？」
「今のところは必要ない」
　――――――では少々お待ち下さい
と伝えキッチンに戻り料理を作っていく。

懐かしいな、ジュードやアルヴィン、ガイアスやミラ、ミュゼ、エリーゼ、ローエン、そして兄さんに作ったのがつい昨日のように思えてならないな。
あの時はキャピキャピのジュードがタイムファクターとして出たときは驚いた。
「おっと！」
唐突に後ろから来た石を掴んだ。外から石でも投げ込まれたのかと思い、玄関を確認するがどこも割れた形跡は無い。
「？まあいいか」

「気づいたか？ザルド」
「ああ、強いなあいつ」
私達はあの料理人の身のこなしが強者特有の隙のない動きに気づいた。
「まさか俺の投げた物を意図も簡単に掴むとはな。それもそれなりに力を入れたやつをだ」
普通であれば身体の何処かに当たり怪我を負う筈がその気配も一切ない。
「・・・となるとＬＶ４かＬＶ５となるか」
「だが、あの豊穣の女将ではあるまいし、ＬＶ５とかであの顔は見たことないぞ」
「・・・幾ら推測しても解らずじまいだ。この店内だと暇だろうし後で聞けば良いだろ」

「それもそうか」

「お待たせしました」
　丁度二人の会話が終わったタイミングで二人分の料理をテーブルに乗せていった。
「おい。貴様、ＬＶは？」
「は？ＬＶ？」
　黒いドレスの女性に突然問われた。ＬＶって何だ？
「何を言っている。神の恩恵で得られるＬＶのことだ。４か？５か？それとも６か？」
「いや、すみません。先ず恩恵授かってないです。それよりも料理冷めてしまいますよ？」
「「は？」」
「はい？」
「そんなわけが無いだろう。本当の事を言え」
「本当もなにも授かってないので無いとしか・・・・」
　二人から訝しげな目線が痛い。貰ってないのだから仕方無いだろうに。あそうだ
「そうだお客さん。これ如何です？」
　そう言い俺はパナシーアボトルと呼ばれていた前の世界の薬の入った瓢箪を取り出

す

「これは?」

「あ~薬膳酒です。何かお二人の身体が優れなさそうなので、まあ騙されたと思い飲んでみてください」

では失礼します。とその場を離れた。

あの二人が来店された辺りからだろうか、男の方は毒がある時と同じ感じがした。女性の方はちょっとよくわからなかったが良くなればいいと思い渡した。もし効かなくてもエリクシールを渡せるように準備しておこう

「・・・どう思う?」

「嘘・・だと言いたいが嘘をついてるように見えないな。」

恩恵も無しに行ったとしたらまさに私達が求めている英雄のようではないか。

まさかなと思い苦笑する。こんな時代に店を出すのはよっぽどの馬鹿かそれとも勇者か。

「(もしかしたら、あいつがそうなのかもな)」

「所でこの薬膳酒・・どうする?飲んで良いなら俺が飲みたいんだが」

「好きにしろ。私は結構だ」

「そうか、では！」
目の前の酒豪は瓢箪を掴み一気に飲んでいく。
プハッと音と共に口を離した。
「どうだ？」
「・・・・」
飲み終わってからか、ザルドは手を閉じたり開いたりし身体を動かし無言になった。
「・・・治った」
「は？」
「いや、だから治った、ベヒーモスを喰らってから蝕んで来た毒が」
「・・・・冗談だろ」
「・・・・冗談だと思うか？」
――――俺が一番信じられんよ、お前も飲んで見ろとザルドが促した
こんなもので治るのなら今までの苦労は何だと思いつつもうひとつある瓢箪に手を伸ばし
「（もしかしたら治るのか・・・・この病が）」
半分期待を込め恐る恐る口に中身を口に入れた。
「どうだ？」

「‥いや、多少なりとも楽にはなったが全盛期とは言えないな」
　そうか。ザルドは落胆したかのような声を出した。
「失礼します。当店からのサービスです。」
　此方を見計らっていたかのようなタイミングで件の料理人がパイを提供してきた。
「おい。この瓢箪は何だ」
「何だって言われても‥故郷の薬ですけど効かなかったです?即効性に優れてるんですけど」
「いや、俺は治ったんだがアルフィアがな」
「ああ、楽にはなりはしたが完治とは言えんな」
「‥そうですか。んじゃこれをお試しください」
　そう言い料理人は青い液体の入った容器を渡してきた
「‥これは?」
「エリクシールと言われる、万能薬ですね。さっきのはパナシーアボトルと言われる状態完治薬ですね」
　さっきの奴より強力ですよ～っとあっけらかんと説明をしてきた。
　少なくとも私達はベヒーモスの毒が消える薬やそれ以上の効果を持つ薬を見たことも聞いたことも無い

「まあ騙されたと思い飲んでくださいよ。提供した身としては使われなかったら何か心苦しいですし」
「・・解った。騙されてやる」
　青い液体はポーションやエリクサーで見慣れてるし飲み慣れている。躊躇いなど一切無用だ。
「ッ!!?」
　グッと中身を一気に煽った。薬の影響なのか胃や腸といった部分が熱くなり次第に手や足も熱を帯びていく
「ッハァ!」
　中身が無くなり身体の熱が退いていくのを感じとる中で今まであった身体の違和感も共に退いていくのを感じた。
「(ああ、メーテリア。これがお前の時もあれば・・いや過ぎたことは何も言うまい)」
「おい!アルフィアどうだ!?」
「・・おいザルド」
「な・・何だ」
「エレボスと話に行くぞ。これでは踏み台にしては高すぎてしまう」
「ッ!?ハッハッハ!!!確かにな!」

私達の会話を聴き「あれ?俺なんかやらかした?」と小声で独り言を言っているやつに対して笑みを浮かべた。

ああお前のお陰で全力で動ける感謝していると心で告げながら

炊き出し

「あ！ルドガーさん！こっちでーす！」
「ん？ああ、わかった！」
　例の二人とあった次の日、アストレアファミリアやギルド主催の炊き出しに協力していた。店に協力する代わりにこういったイベントにも協力するようアストレア様やギルドと約束を交わしていたからだ
「みんな！この方がこの時期にお店を開いたとっても奇特な人よ！」
「へえー。それはそれは何とも言えないお方で。特殊な性癖でもお持ちか。それとも、とてつもなく運が悪いんですかね」
「ああ。幾らなんでもこの時期に店を開くとか自殺願望でもあるんじゃないのか？」
「ッ!?コラ。輝夜、ライラ、二人とも！そう言うことを言うんじゃない！」
「・・・あはは。ルドガー・ウィル・クルスニクです。よろしく・・・・」
　　――――よろしく～っとアストレアファミリアの皆が返す
　実際運の悪さは他の追随を許さないかもしれないな・・

「っと。一応お店で作ったスープとか大鍋に容れて持ってきたんだけど、何処に置けば良い？」
「えっ!?本当に!?ルドガーさんの作ったスープてばすんごい美味しいから楽しみ！」
「・・アリーゼが飲むわけではないので駄目ですよ」
「ええ～。でもでも味見ぐらいなら」
「俺は構わないよ。それに材料があるなら幾らでも作れるし」
――――ヤッター！それじゃ遠慮なく！
この赤髪の美少女とはアストレア様と顔合わせを行ったときに代表として自己紹介は済ませた仲でその際幾つか料理を提供し、好評価を得ている
まあ、そう頻繁に来ることが叶わないためお店が暇になるのだが。
「って、何で皆四つん這いに？」
「・・いや、やっぱり女としてのプライドが粉々になるなあって」
「・・飲まなきゃ良かった。でも美味しい」
「やっぱり、今ぐらい出来なきゃ駄目なのか・・？」
「・・何をしとるんだお主ら」
料理の評価を得たと同時に女性としてのプライドを粉々に壊した時と、ドワーフと思われる御仁が此方に話しかけてきた。

「：あ、ガレスのおじ様」
「いつも騒がしいお主らが静かだと、些か気味が悪いな。何があった」
「いや～、ちょっと女としてのプライドが：ね。アハハ」
「：まあ何があったとはもう聞くまい。それに此方の青年は？あまり見ない顔だが」
「初めてまして、ルドガー・ウィル・クルスニクです。最近お店を開いたので、まあお手伝いに」
「ほおー、この時期に店を出すとは中々豪気な奴よ。それにお主結構やるように見えるな。何処かで鍛えていたのか？」
「まあ、そんなところですね」
「その内手合わせをしてみたいものだが、まあいいわい。儂はその辺を警備しとるから何かあれば任せろ」
　ではな。後ろ手を降りながらこの場を去っていき
「ルドガーさん。一応伝えておくわね。彼はガレス・ランドロック。二つ名は［重傑（エルガルム）］ロキファミリアの幹部よ！」
　プライドが治ったのかアリーゼは立ち直り先程のドワーフについての詳細を語ってくれた。
　ロキファミリアとの協力は得ていないから詳しくは知らなかったが、中々強そうな御

仁だ
「っとすまん。ちょっと離れるな。素材が足りなくなった。」
「ん？ええ！解ったわ。この場は任せなさい！」
「はい。行ってらっしゃい。ルドガーさん。」
――――そう言えばずっと無言だったけどどうしたのリオン？
――――：いえ実は［重傑（エルガルム）］がいた辺りから驚きで声が出無かったので：
素材をとりに離れると後ろからその会話が聴こえ若干苦笑しながら離れる
そして、少し離れたところに食材を調達していると
「あぁ～：久々に晴れやがって、良い天気じゃねえか」
――――空にも祝福されて、きっと良いことがあるんだろうな～
そう呟いているピンク髪の女性がいたためぶつからないように身体を動かしたが交わしきれなかったため肩がぶつかってしまった。
「ああ、ごめん」
謝罪を行いその場を離れようと足を動かしたその時
「ッ!?」
手荷物を其処らに投げ、殺気を感じ慌ててしゃがむと頭上に剣が通り過ぎた！
そして、続けざまに2撃3撃と繰り出してきたが半身にしそして後退し躱す！

「おいおい。何で生きてんだお前？ＬＶ５だぞ？」
「・・ッ何でって言われてもな」
「まあいいか。殺しがいがありそうだしな！」
「ッ!?くそ!?」
　先程の剣筋とは違い、眼や顎、首や鳩尾等の人体の急所を的確に狙う殺気に満ちた攻撃を仕掛けて来た
「（やっぱり身体が鈍ってるな！）」
　この世界に来てからか録に身体を動かしていなかった為躱しきれず次第に切り傷が増加していき
「（でもまだ、身体に殺気をはっきり感じるから躱せる！）」
「オラオラ！どうしたどうした!?さっきまでの動きとはえらい遅えじゃねえか！」
　何度も躱す俺に苛立ちを覚えたのか先程よりも単調な動きが増えていき、反撃のチャンスも何度かは確かに存在した。
　しかし
「（こいつは・・誘ってるのか！）」
　先程よりも遅い攻撃を何度も繰り返し、明らかに誘っているよと、言わんばかりの速度の為次第にそう思えて中々手が出せず仕舞い。

「(援軍を待とうにもあとどれぐらい待てば良いんだ!?)」
「ッハー!こいつで仕舞いだ!」
俺が動きを止めたと同時に相手は頭上から真下に掛ける唐竹割りを繰り出してきた!
「くそ!?」
その時だ、前の世界出来事が浮かんだのは。
自然と身体が動いた。当たり前のように武器を持ち相手を倒してきた技が。
いつの間にか手元にそれを実行するための充分な質量と重量を感じれる武器が現れ身体もそれに沿うように勝手に動き
「アッパーブライス!」
相手の剣とクランスピア社で受け取ったハンマーが衝突し金属音が鳴り響く。それだけではなく、相手の剣が消失しており、後方でヒュンヒュンと風を切る音と共に消えていった。
「・・てんめえ。その武器!何処から出しやがった!」
「ヴァレッタ様!これ以上ここにいると冒険者が集まってきます!撤退を!」
「〜〜ッ!!!くそ!撤退だ!」
ヴァレッタと呼ばれた相手とその周囲にいた白い服の集団は一斉に撤退していった。

「ルドガーさん！大丈夫怪我してない!?」
「ルドガーさんご無事ですか!?」
「・・おう。何とかね」
例の集団が離れたと同時にアストレアファミリアの面々も集まっており
俺の怪我を見て何人か引いていたが仕方無いだろうに
「（にしてもこれは、ちょっとまずいな）」
思った以上に身体が動かせなかったところを見ると先程の時と同じような時、ろくに戦えないだろうと自分を見つめ直す。
「（ウラノスとかに相談するか）」
せめてダンジョンに入る許可は貰いたいもんだと緊急時に備え鍛え直そうと思い直した。

炊き出しの後、そして・・

ヴァレッタと呼ばれた闇派閥(イヴィルス)の集団と戦いの後、アストレアファミリアとガネーシャファミリアと合同で市民の救助を行っていた。

先程まで、炊き出しを行っていたが周囲の風景は惨憺たる有り様で見る影もない。

何処もかしこも、家は潰れ地面は抉れ負傷者多数の悲惨な状況だった。

「おい！ポーションとか持ってるやつはいるか!?此方に怪我人だ！」

「こっちもだ！治癒術者も早く！」

幾ら人海戦術を駆使し救助を行おうとも人手が足りなくなるのは当然であり、次第にヤバくなるのも必至だった。

「っ!?くそ上手くいけば良いんだけどな！」

流石に見てるだけには居られなくなり近くにいる冒険者に近寄る

「おい！今すぐ近くの怪我人を一つに集めてくれ！」

「多人数をまとめて治療できるとでもいいたいのかよ！」

「良いから早く！集めてくれ！頼む！」

「ッ～～!!お前にかけるからな!お前ら近くの怪我人を一つに集めてくれ!」
その冒険者が周囲に呼び掛けるとおよそ２０人近くの怪我人を冒険者が集めてくれた。
「ほれ!集めたぞ、早く頼む!」
「ああ、ありがとうな。ちょっと集中する!」
その多数の怪我人を目の前に置き自分が知る広範囲かつ回復速度も早い精霊術を思い浮かべ
「(これで出なかったら恨むからな!)」
『白き精霊舞い、祝福の羽踊る!』
詠唱を行うと同時に身体の内側から何かがごっそりなくなる感覚が全身に伝わる!
――ッ!?成る程‥!これが精霊術か‥!結構辛いな
初めての感覚に一瞬立ち眩みが起こるが両足に力を入れ踏ん張る!
「ッ!!『ナース!』!!
怪我人を中心に人の形をした白い物が出現し周囲一帯を癒していった!
無事に発動し怪我が治ったことに安堵し、ふうっと溜め息をつく
「これで、多分大丈夫な筈だ。安静にしておけばな」
――ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

治療が終わり暫しの静寂の後周囲の冒険者から大歓声が起きた！
「あんた！すげえな！何もんだ!?」
「いや本当にすげえよ！」
「おい！此方にもいるんだ！同じのできるか!?」
最初に声をかけた冒険者や手伝ってくれた他の人達も肩を組んできたり背中を叩いたりと称賛の声が轟く！
「ッとまだいるんだよな!?案内してくれ！」
「ああ！此方だ！」
その後俺は『ナース』並みに高威力の回復術は控えたがそれでも、充分に回復する術を使用していき
『皆に安らぎを！ピクシーサークル！』
『降り注げ！博愛の慈雨！ハートレスサークル！』
そして怪我人が軽症又は重症の人達は無事に終えたが、それでも何人かは間に合わない。
それでも微かな希望があるかと思い密かに『レイズデッド』を試したがやはりそう都合良くはいかなかった。

「(‥やっぱりだめか)」
その時、以前店に来たことのある青髪の姉妹の妹アーディが合流し
「ねえ!怪我人は!?どうなってるの!?」
「落ち着け!アーディ!怪我人の治療は終わった!もう大丈夫だ!この人が治療してくれた!」
手伝ってくれた冒険者とそのアーディは同じファミリアらしく俺が治療したということを説明してくれた。
「この人って‥ルドガーさん!?治癒術使えたの!?」
「ああ～うんまあ?」
「いやいや、謙遜する必要なんか無いって２０や其処らの人数をまとめて治療できる奴なんて一人二人ぐらいだぜ!?」
「嘘!?そんなに強力な魔法使えるの!?」
‥二人から意外そうな目で見られた。人を見た目で判断するんじゃありません!
「‥あのさ、ルドガーさんその治癒術を見込んで頼みたいことがあるんだけどいいかな?」
「内容によるけど」
「実はさ‥」

アーディから聞かされた内容とは、後日闇派閥の三つの施設を同時に落とすためにアストレアファミリアとガネーシャファミリアにヒーラーとしてついてきて欲しいとの案件だった。

「成る程な。ああ構わないよ」
「いやあ、やっぱり駄目‥じゃないの?危険だよ?良いの?」
「これでも、自分の身は自分で守れる程度に鍛えているからな」
「ん。わかった。君の覚悟は確かに受け取ったよ。じゃあ、当日の作戦について説明するから付いてきて」
「ちょっとまて。ルドガーさん、だったよな」
「?」
「‥‥死ぬんじゃねぇぞ。後で酒でも奢らせろ」
「っああ。楽しみしとくよ!」

――――またな!

俺たちは酒を飲み交わす約束をしその場を離れる。何度か走りながら後方を振り替えるとずっと手を振っている姿を確認し――――これは生き残らなくてはと心に決めた。

作戦決行当日

「はあー!?それでルドガーさん。連れてきちゃったわけ!?」

「‥あはは。そうなんです」

アストレアファミリアとガネーシャファミリアが集まって居たところにアーディと共に到着すると、――――えっ？何で要るんですか？という視線を浴びた。

その説明にアーディはアリーゼと事情を話しており苦笑を浮かべながら――やっぱり不味かったかな、と表情に出しており

「‥はぁーー。まあ連れ来ちゃったら仕方無いわね。宜しくねルドガーさん。」

「ッ!?良いのかアリーゼ!?」

「だってしょうがないわよ。というか、あのヴァレッタっと私達が来るまで互角にやり合っていたのよ！充分戦力になるわ！」

その言葉に周囲が一気にざわつく

「あの［殺帝］<アラクニア>と互角だと‥そうしたら少なくともＬＶ５はあるってことだよな」

「そしてアーディの話を聞く限り広範囲の治癒術も使えるときた。そのような人物知らない筈はないんだが‥」

ざわつきがさらに大きくなりかけたときアリーゼは両手を合わせパンパンと鳴らし

た。

「はーい！取り敢えず話はあと！これから敵のアジトに乗り込むんだから。詮索とか後にしてね！それとルドガーさん。一応守るように動くけどあまり期待しないでね。絶対やばくなると思うから」

「ああ。わかってる」

「：なら私から言うことはないわ」

――――それじゃあ皆、いくわよ！

アリーゼはそう告げ自分達が任された闇派閥の施設に動き出す。

――――『大抗争』まで、あと1日――――

施設内戦

「皆！施設を制圧するわ！ネーゼ！マリュー！イスカ達を連れて散って！私達本体は奥までいく！ルドガーさんも私達に付いてきて！」
「わかった！」
闇派閥の施設は何かを精製するような工場の場所であり、高低さがある場所な為部隊を分けなければ制圧できなかった。
「一人足りとも逃がすな！全員無力化し捕縛しろ！」
「通路は奥！後は上！来んぞ！」
「任せて！」
ガネーシャファミリアのシャクティ・ヴァルナの指揮と激励の元、ライラの注意喚起を聴き、対応するアーディ。
「青二才、右をやれ。逆は私が仕留める」
「――――言われなくとも！」
そして、輝夜とリューの見事な連携により闇派閥の連中は次々と倒れていく。

「(見事な連携だな。ジュード達を見てるみたいだ)」
俺と出会う前にジュード達は世界を救ったと言っていた為続々と嘗ての仲間に会うたび見事な連携を発揮し敵を薙ぎ倒して行ったのを思い出す
――――ただ、どうしても違和感が拭えない。確かに順調に制圧は行われているが何か起きそうな気配がある。
「(特にアーディだ。彼女に何か起こる気がするが、それは何なのかわからない)」
――――一応渡しておくか。と思いアーディを呼び止め
「どうしたのルドガーさん。」
「これを渡しておく」
懐から万が一の装備、<リバースドール>を彼女に渡した。アーディは白い筒上の持つところが細く先端が丸い何とも言えない物を変な目で見てた。
「え・・何これ」
「お守りだ」
「え、これが・・?」
――――そんな目で見ないでくれ。結構有用な物なのに、まあ一回使ったら壊れるけどな。
「取り敢えず、それを持っている限り致命傷は避けられる。」

「ふーん。そんなに強いものなの？」
「いや。何かを展開するような物じゃなくて、死ぬようなダメージを受けたら身代わりになってくれる物だな」
「・・・いや充分強いよ。ルドガーさんって本当に何者？変なアイテム持ってるし、治療術使えるし、しかもそれなりに強いときた。」
「・わかった。この施設を無事に制圧できたら、教えるよ。後、ルドガーで良いよ」
「言ったね、ルドガー。わかった、君の秘密必ず教えてね！」
――――それじゃ！
アーディは笑顔で前線に戻っていった。実際あれが発動するような事にならないのが一番良いんだが、念には念をだ。
「（ミラの時みたいに、後悔したくないしな）」
正しくは分子ミラの事だ。正子世界のミラとは最後の戦いまで一緒に行動できたが、分子ミラとは最後の道標を確保する際のゴタゴタにより二度と会えなくなってしまった。
その後、エルは本当のパパ。つまり分子世界に存在する父を失くすといったダブルパンチを受けて少々塞ぎ込んだことがあった
それを乗り越えカナンの地にたどり着き今こうなっているわけだからな。

――――やれることは全部やろう。後悔はそれからだ

決意を新たにしたところで、本隊が開けたところにたどり着き

「よぉ、来たなぁ」

「殺帝！」

待ち伏せていたかのようにヴァレッタと呼ばれていた闇派閥に所属している奴がその場にいた。

「フィンがいねぇ・・・ちッ外れだぜ。あの女、てきとーな情報寄越しやがって。にしてもお前ら来るの早すぎんだろ。電光石火どころじゃねぞ、たく。」

その言葉とは裏腹に汚い笑みを浮かべた。彼女の何かを企んでいる表情を見て周囲の状況を確認する。

「（・周囲に敵は・・・・・）見つけた！」

両手にクランスピア社製の拳銃を出現させ敵を見つけた周辺に弾を撃ち込んだ！

「グハッ!?」

「ルドガー!?一体何を!?ッ！伏兵!?」

俺の銃声が切っ掛けとなり闇派閥の伏兵とアストレア、ガネーシャファミリアの部隊が戦闘が行われる。

「チッ！またあいつかよ！まあいい。出てこい！お前ら！」

そこからは乱戦状態に縺れ混み、俺は双銃を使い相手を屠っていく。敵の攻撃を躱しつつ足に弾を撃ち込み、背後と正面からくる敵を同時に倒し、バク転を行い手や足、肩といった箇所を狙い致命傷を負わせない程度に倒していく！

「（皆は・・・今のところ無事か！）」

自身の周辺を無力化に成功したところで、それぞれのファミリアの負傷者がいるか確認する

その時、アーディの方で動きがあった。彼女の方にナイフを持った白いローブを着ている子供がいた。

「な・・・子供!?こんな幼い子まで巻き込んで・・・！ナイフを捨てて！闘っちゃ駄目だ！君みたいな子に武器を持たせる大人の言うことなんか、聞いちゃいけない！」

――――私は君を傷つけたりしないよ！さあこっちへ！

その言葉を聴きヴァレッタはヒャハという言葉を発し

「（ッ!?しまった！）」

ヴァレッタの表情を見て直ぐ様アーディに近寄ろうとするが距離が有りすぎた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・神様」

――――おとうさんと、おかあさんに、会わせてください。

その言葉が言い終わると同時に周囲が爆音に包まれ

「「「〜〜〜〜〜〜〜〜ッ!!!!!!!!」」」

周囲の光景を確認できる位に回復するとヴァレッタが高笑いをしていた。

「ヒャハハハハハハハハハハハ!!見てるか！タナトスの野郎！お前が誑かした野郎冒険者を道ずれにしたぞ！」

――――ヒャハハハハハハハハハハハ

その桁笑いを聴き胸糞悪さが混み上がりそして同時に安堵が浮かんだ。

「本当に渡して良かったよ」

「あぁ？おいおい、どういうことだ。確かに爆発を受けたよな？」

――――どうして無傷なんだよ

倒れているアーディの傍に近寄り渡しておいたリバースドールを手に取ると、掌で砂上になり周囲に散っていく

流石に、爆発を受けたからなのか気絶はしているが怪我は何処にも見当たらない。その彼女を安全な場所に連れ出そうと背中に右手を当て後ろ膝に左手を置き支える。所謂お姫様抱っこだ

「ッ!?アリーゼ！輝夜！倒れている連中から離れろ！」

――――――吹き飛ぶぞ!!!!

ライラの警告から皆は直ぐ様距離を取るためその場を離れるが

「主よ!‥‥この命どうか愛しき者のところへ!」

「この命を持って、罪の清算をぉー!!!!」

「「ッッ〜〜〜〜〜〜!!!!」」

先程の子供の爆発により周囲から爆発が連鎖していき

そして、爆発の影響により建物事態が崩れそうになる。

「ッ!彼女を任せるぞ!」

一番近くにいた、リューに抱えていたアーディを渡す。

その行動に彼女は驚きはしたが生きていることを確認でき安堵した表情になった。

「ッ!ルドガーさんは何を!」

「少し時間を稼ぐ!」

――――――稼ぐってどうやって!

後方に聞こえる彼女達の声は心配に満ちた声色に包まれていた。

もうすぐで崩れそうな建物、怪我人多数、早くでなければならない状況で出きるとしたら、

「(建物を凍らして時間を稼ぐ!)」

二つのファミリアのメンバーが後ろに行ったことを確認した後、俺は嘗ての仲間の一人を思い浮かべた。
「（ローエン！俺に力を！）」
回復、指揮、精霊術等のエキスパート、ローエン・Ｊ・イルベルトの秘奥義を唱える準備に入る！
『『精霊交響曲！』ッッ!!!」
――――ヤバい！治療術を使ったとき以上に持ってかれる量に驚きローエンを称賛する
まあこれぐらい出来なくちゃ、守れないか！
身体に集まる力を全力で放つ！
『『タイダルウェイブ！』』
前方２０メートル先に半径２５メートルの大渦が現れ
「ッ！なんだこれは！」
「何で行きなりこんなものが!?」
迫ってきていた闇派閥の連中が大渦に飲み込まれていき
「これで、終わりだ！」
『渦塔は氷結し光も闇に凍る！』

大渦から水柱が立ち上ぼり全てが一瞬にして凍りつき
『無情なる諸行に・・・挽歌を!』
凍りついた水柱や大渦が砕け散っていく
『グランドフィナーレ!』
その言葉を発したと同時にとてつもない倦怠感に襲われ意識が遠退いて行くのを感じた。
しかし、術を放った影響か建物も人も何もかもが砕け散っていったため、後ろから俺の名を呼ぶ声と心配する声が聞こえてきた
――――ああ、でも守れてよかった。
――――お見事です。ルドガーさん。
最後に幻聴かローエンの声が聞こえた気がした為どうしようもなく懐かしい感覚にとらわれながら身体が地面に倒れた。

危なかった・・・・

「・・・・・・・・・・・あ」

意識が回復しゆっくりと瞼を開ける。そこは今まで見たことのない天井で少なくとも俺が知らない場所だった。

「・・・何か・・いつも以上にボーッとするな・・」

俺自身睡眠が深いのか、時間ギリギリになることが多いのがたまに傷なんだが、今は普段のそれより頭が働かない。

確かあの時、施設から脱出するため強大な精霊術を公使したんだった。

「・・・ていうか、ここどこ?・」

寝ていたベッドから上体を起こし周囲を見渡す。その時布団の右側に違和感がある

「・・?・」

視線を送ると青髪の少女。アーディの姿がそこにはあり、彼女は疲れていたのか傍らにある椅子に座りながら上体をベッドにやり爆睡していた。

「くっ・・・・・・・!」

その姿が少し面白く頭に手を置き髪を撫で始める

――何だろうなこのエルと似たような雰囲気は

「♪～♪♪♪～♪～♪～」

更に興が乗り一族に伝わる歌詞もとい鼻唄を歌った。

「‥‥‥‥っ‥‥ん」

その歌を聞くとアーディは表情を柔らかくし身じろぎをし瞼が少しずつ開いて行くのがわかった。

「‥‥ん～～？ル‥ドガー？」

「おはよう。よく眠れたか？」

その言葉を聞くと彼女は少しずつ破顔していき、ル‥ルルドガー？ルドガー!?

と慌てていった。

どうどうと俺は落ち着かせると、アーディも落ち着き始めたのか深呼吸を一つ行い

――皆呼んでくる！

と慌てて部屋を飛び出していった。

「(落ち着いたんじゃなかったのか‥‥)」

さっきの深呼吸は何だったのかと思い扉を見ているとノック音が響き渡る。

ガチャっという音と共に入られたのはアストレア様だった。

俺の起きてる姿を確認しホッとしたような表情を見せたあとベッドに近寄り

「おはようルドガーさん。身体は大丈夫かしら?」
「ええ。見たところご心配をお掛けした様子で」
　――――申し訳ないです。ベッドまで借りたようですし。
　彼女は、その言葉に首を左右に降ることで否定し「それは違うわよ」と続けた。
「ルドガーさん。あなたは私達ファミリアの家族を守ってくれた恩人です。なのでこれは正当な報酬もとい、私達の成すべき事案です」
　その言葉を発した時の表情はとても晴れやかであり、曇りは一切なかった
「ハハハ・・」
　残念ながらそのときの俺は肯定も否定も何も出来ずに愛想笑いを浮かべることしか出来ない
　丁度その時、扉がバタン!と勢い良く開く音が響き渡りアストレアファミリアのメンバーが入ってきた
「ルドガーさん目が覚めたって!?」
「ようやく目が覚めやがったか」
「いいご身分ですな。私達がこんなに身を粉にして働いているというのに」
「輝夜、ライラそういうことは言わない方がいい!すみません。ルドガーさん目が覚めて良かった」

――いや～本当に良かったよ。ホントホント。
アリーゼの元気な声とライラと輝夜の皮肉めいた言葉に対するリューの諌める言葉に続いて他の面々も心配の声が部屋中に響き渡る
アリーゼは心配する声と共に何かを聴きたそうな表情を浮かべ恐る恐る訪ねてきた。
「‥あのさ。ルドガーさんこんな時に聞くのもあれなんだけど‥」
「ああ‥うん。何となく聞かれると思ってた」
彼女は頷き、大きく深呼吸し決意を固めた表情で
「‥わかったわ。それじゃあルドガーさん。貴方、本当に何者？少なくともあの施設で使われた魔法は一般の人が使えるものとは思えない」
「そして、闇派閥を倒した時に使った。あのちっこい武器だ。あれは私でも見たことがねえ」
周囲の空気が一瞬にして冷たくなった。恐らく俺が闇派閥に属している可能性を考慮していたのだろう
‥やっぱりか。流石に緊急時に際してかなり頑張ったから訪ねられるとは思ってたけどな
「‥‥話さなくちゃダメか？」
「無理にとは言わないわ。でも中にはあなたが闇派閥なんじゃないか。もしくはそれに

類する者なんじゃないかっていう話も上がってるのよ。それを払拭したいの」
「・・・わかったよ。でも荒唐無稽の話だし、それにかなり長いぞ?」
「上等よ。どんな話でもどんとこいよ!」
そしてファミリアの各々地面や椅子、ベットに座り俺の話に耳を傾ける。
◇◆◇◆◇◆◇
「そうだな。まず何から話したもんかな。何から聞きたい?
ここに来た目的?それは穏やかな生活をするためかな。
それじゃああの強さは何だって言われてもな。あれは憧れた人に追い付くために必死になった結果だな。
・・・なんか色々省略するとめんどくさそうだから。もう1から言うぞ。
まず、俺はこの世界の生まれじゃない。エレンピオスって言うところで育ったんだ。
ちなみにエレンピオスって幾ら調べても出てこないぞ。なにせ他の世界だし。
どうやって来たのかってそれはオリジンに無理矢理こう・・・
オリジンっていうのは無を司る精霊で・・・って話が脱線するってその話は後で。
えーと。なんだっけ?あーそうそう。俺は今の年になるまでそこで兄さんと一緒に暮らしてたんだ。
・・・言っとくけど俺は二十歳だからな。

って！なんで「えー意外」みたいな反応するんだよ。
いいから次いくぞ。
俺は就職先である料理店で働こうとした矢先冤罪にかけられたんだ。実際はやってないけどな：おい！木刀を振りかぶるな！本当だって！
あ～～っもう！これじゃあ幾ら経っても話が終わらない！
ダイジェストに伝えるぞ！この後は
１つ借金抱える！
２つ指名手配されて仕事がクビ！
３つなんかエージェントにスカウトされる！
４つパラレルワールドを壊しにかかる！
５つ力の代償を知ると同時にもう一人の自分を殺す！
６つ大切な人と身内を亡くす！
７つ自分を犠牲に娘と世界を救った！
以上！
あっ！いやっ！ちょっと！まって！物を投げるな！武器を投げるな！枕を投げるな！簡略しないと終わらないだろうが！
ってなんだよ輝夜。アーディ。ハンカチをなんで俺に渡すんだよ。

涙がでてる？いやまさか・・・あれ本当だ。何でだ？
もっと泣いていい？なんだったら胸を貸すってなんで唐突に優しくなるんだよ。流石に年下に甘やかされるのはちょっと・・・まてよ。そんなお前らもしんみりするなっての！」
◆◇◆◇◆◇◆
「「・・・・・・・・・・・・」」
「ルドガー一言いい？」
「・・・どうぞ」
アリーゼが大きく息を吸い発した一言が
「重いわ！」
でしょうな
「いや。ごめんなさい。まさかこんな話がぶっ混んでくるとは思ってなかった。なんかこうもっとキラキラした話というか、愛と正義と勇気の物語かと思ったんだけど、思った以上に重すぎて笑えない」
「ついでに言うとお前運悪すぎ」
「うるせえ！」
「・これを知っているのは？」

「ウラノスだけですよ」
‥‥唯一の幸運はそこよね。後でお話聞こうかしら‥
アストレア様は俺を気遣ってか、ずっと思案している。
「でもでも何か納得いったわ！ルドガーって何処か浮世離れっていうか、何かこう違和感があったのよね！」
「何かって何だよ。でもそれには一理あるぜ」
「そういえば、精霊‥術？を使う時とかあの短文で高威力なんて滅多にお目にかかれないもの」
「そういうことか、普段使うことの出来ない技を公使して意識が飛んでしまったわけか。このたわけめ」
各々が俺に対し評価を連ねているところでアーディはずっと無言だった。
――アーディ‥？どうした？
訪ねると彼女は「‥そっか。うん‥」と小さい声で頷いていた。
「‥あのさ。ルドガー‥？」
「ん？どうした」
「えっとね。改めて言うの何か恥ずかしいんだけどね。えへへ」
彼女は何処か照れた様子で頬を桜色に染めとても良い笑顔を浮かべ

「助けてくれてありがとう。ルドガー」

この表情を見て俺は、確かに救えた命が此処に会ったんだと確信し、笑みを浮かべた。

現状報告

俺の目覚めを確認しそして、おれ自身の事を教えてもらうという約束を達成したアーディはひとまずガネーシャファミリアに戻っていった。
「それじゃあ、今のオラリオの状況を伝えるわ」
「ああ」
――そうね。まずは・・・・
アリーゼから俺が気を失ってからの状況を聞いた。あの後各地で爆発が起き混乱状態に陥っているらしい。原因は［火炎石］を爆破させるための［起動装置］を身体に取り付け闇派閥が誑かした民間人を自爆特効させてるみたいだ。
それに乗じて9つ位の神がこの下界から光の柱となり永久追放になったらしい
「そして何より、厄介なのが敵勢力なのよ。」
嘗てのゼウスファミリアとヘラファミリアの最高幹部の二人が闇派閥に属して一緒に暴れているみたいだ
「因みにその二人の風貌は?」
「そうね。一人は全身黒い鎧を来ている大男」

「そしてもう一人が灰髪の黒いドレスを着た女性ね」

……ん？

「その二人が非常識じみた強さで何でも、ロキファミリアとフレイアファミリアのトップがボコボコにやられて……どうしたの？頭なんか抱えて？」

「……ああ……いやその……なんだ」

「何よ。煮えきらないわね？」

――――その二人この間来た。お店に

そう伝えるとその場にいた全員が唖然とした顔で

「「はぁ～～～～!!!??」」

とあるボロボロな教会にて

「……すまん。もう一度言ってくれ。俺の耳が腐ったみたいだ」

「何度も言わせるな」

「そうだ。何回言わせれば良いんだ」

「……いや…だからって、さっき最後の晩餐的な意味で食事に行ってこいって送り出し

たら病気が治ったって意味わかんねえよ」
　そこには、灰髪の黒いドレスを着た女性［アルフィア］と黒い鎧に包まれた大男［ザルド］そして、黒い自称イケメンのお兄さん（神）［エレボス］が話していた。
　話を聞いていたエレボスは額に手をやりながら「どうしてこうなった」と呟いて二人に目線を送る。
「‥ちなみに、その店は今でもあるのか？」
「ああ。東のメインストリート沿いの近くにあったな。丁度［豊穣の女主人］とは反対方向だな」
「それに、あの薬にも驚いたが料理も中々だったぞ」
「ほう。ザルドが言うんだから確かに旨いんだろうな。今でもやってないかな‥」
　閑話休題
「気を取り直してお前ら二人どうする？毒とか病気が治ったらもう無敵じゃん」
「それなんだが、条件付きでやればそれなりにイケるんじゃないかと二人で話してな」
「ああ。戦うときに［一回でも気絶させれば闇派閥から手を引こう］とか言えば全力を尽くすだろうさ。あの連中は」
　――――万が一にもあり得んが
　その言葉に神は腹を抱えて笑い「確かにな。もう十分偉業だよな。オラリオから撤退

させた英雄みたいな?」と続けた。

「さて、ルドガーについてはさておきこれからの行動方針なのだけれど」
何か意見はあるかしら。アリーゼはファミリアメンバー全員に問いかける
「それじゃあ私から。先ずは巡回についてなんだけど・・・」
そうして、各々の考えを順番に発言していった。ロキファミリアとの情報交換やガネーシャファミリアとの連携。巡回の時の人数構成。等々を話を詰めていく
「うん。うん。ありがとう。それじゃあ今纏めた構成でやっていくわね」
その時俺は「(連携・連携か)」と呟き手にアローサルオーブを持つ
これがあれば初対面でも連携がかなり出来るんだけど生憎1つしかないしな。
オーブをジッと見てると件の懐から違和感が出てきた。それをまさぐるともう一つアローサルオーブが出てきた。
「(・・・もうなんでもありか)」
この現象について思考を止め「すまんちょっといいか?」とアストレアファミリアの幹部を呼び止める
「何だよまだ何かあるのか?」
小人族のライラが疲れ始めたのか言葉の端に刺がある感じに聞いてくる

「これやるよ」
　そうして幹部全員に行き渡るようアローサルオーブを手渡す。
「これは？」
　リューの問いに対し俺が前に使ってたアイテムだよっと説明すると皆の目がギョッと見開いた。
「・・まさか爆発するようなものではありませんよね」
「まさか・・それは戦闘中の意思疏通がとてもしやすくなるものだよ」
　やはりピンと来ないのか疑問視する人も何人かいた。
　ここは論より証拠だな
「アリーゼちょっと」
「？ええ」
　――――――リンク・オン
　と呟くと俺の持っているオーブとアリーゼの持つオーブが共鳴し赤色の線が二人を繋いだ。
「「!!???」」
　その現象に距離を取り始めたメンバーだが害はないと悟り近寄ってきた。
「・・これは？」

「これが連携の源って言えば良いのかな?この線が繋いでる間は一心同体って感じかな」

――――まあ戦えばわかるよ

その言葉に好戦的な女性人が目をキラリと光らせ

「では、ルドガーさん早速お手合わせお願いしても?」

「戦ってわかるならさっさとやろうぜ」

「はい。ルドガーさん。私も参加します」

「当然!この私もね!」

ん?このパーティーだと・・4対1か?

「「当たり前じゃない」」

それに、異世界の英雄とお手合わせ出来るなんて光栄だもの!

その言葉に「ハハハ・・これ行けるか?」と内心不安になるが、男のプライドと言うものもあって「わかった」と了承した。

・・・勝てたら・・いいな

ふと出た言葉にアストレア様は微笑みを浮かべていた

鍛練

ヒュンヒュンという風を何度も斬る音が耳元から聞こえ正面には二人の少女が殺気に満ちた形相で攻撃を繰り出し、背後からはまた二人の着物を着た少女と小人の少女が好きあらば俺に攻撃を仕掛けてくる。

目の前の攻撃には武器の長さを見てギリギリ当たらない所を見極め最小限の動きで躱し、微かに上体を後ろに反らし目の前には剣先が通り抜け、突きには半身になることで躱し、下段の攻撃に後退することで避けていく。

当然背後からの攻撃も行われるが正面の攻撃の阻害させるよう位置を調整し受け流す

「ええ・・まさかここまでなんて」

その一連の動きは戦闘というよりある種の舞に近い。必要最小限の動きで最大限のパフォーマンスを行っておりそれは、戦わない神からしても流麗であり綺麗であり素晴らしいものであった。

そして、その時間は無限には続かず終わるときを迎える

「ツアリーゼ!」

「わかったわ！」
　リューの声に反応するアリーゼで二人はお互いが何をしようとするのか理解し連携攻撃を繰り出すが
「甘い！」
　嘗ての仲間、ジュード・マティスに習った［集中回避］をし二人の背後に回り込んだ。
「そっちが！」
「っ!?」
　背後に回り込むのが想定済みだったのか回避の後の硬直を狙って輝夜とライラが十字に交差するよう切り抜けてきた。
「‥ぐっ！」
　見事な連携を流石に捌き切れず膝をつく
　鍛練前に話した勝利条件は［どちらかが気絶、もしくは武器が相手方に明確に命中する］だ。
　今回は俺の敗北として鍛練が終了したん‥だが
「？」
　終わったにも関わらず皆がじっと立っており
「どうした？‥」と声を掛けたら戦った面々が一斉に此方を向き一気に詰め寄ってきた！

「ル・ルド・ルドガー！」
「うえ!?あっ・・なに?・どうした!?」
　彼女らが言うには従来の動きより遥かに動きやすくなり途中から殆んど無言で意志疎通が出来何とも言えない感覚を味わったとのことだ。
　何よ！これ半端無いんだけど！アリーゼ落ち着いてでも確かにこれは良い感覚でした。糞妖精に同意するわけでもありませんが確かに見事な感覚でした。ああこれは他の派閥にはやれねえな。
　キャーキャーと先程の戦闘中の感覚についてあれやこれやと話している彼女達を尻目にアストレア様が俺の近くに立っていた。
「お疲れ様。ルドガー凄かったわよ！」
「あ・・・ハハ、まあ負けちゃいましたけどね」
「何を言ってるの」とアストレア様は俺の言葉を否定し「あなた殆んど攻撃していないじゃない」と
「ああ、やっぱりバレました?」
「当たり前よ。あんなに露骨に攻撃しないとか、貴方かわすか弾くか受け流すかどれかじゃない」
「ハハハ・・だってそうでもしないと危なかったですし・・」

「それってどういう？」

――――――そのまんまの意味ですよ。

その時「アストレア様〜！」という元気な声に遮られた。アリーゼは此方に大きく手を振りながら駆け寄り「どうでした!?どうでした!?」

と詰め寄り

「ええ流石皆ね凄かったわ！」

「まあ！当然よね！何たって私完璧美少女ですし！バチコーン!!」

「「イラッ☆」」

「まあそんな事よりも私は気になっているのが、そちらの御仁が一度も攻撃を仕掛けてこなかったことに少々疑問があるのですが。まさか女だからとかいう話ではありませんよね？」

その言葉に俺は首を横に振ることで否定をし「そんな理由はないさ」と続けた。「ではなぜ？」と聞き返され言いずらそうに

「・・多分だけど全力でやったら一瞬で終わりそうだったから」

瞬間その場の空気が氷つき今までの明るいムードが消え去る

ユラリユラリと此方に輝夜が近づき胸ぐらをワシっと掴んできた。

やばい・・・目が光ってない
「ほぉーでは、本気見せてもらいましょうか？ルドガーさん」
「も・・もち・・・もちろん！」
直ぐ様直立し双剣を逆手に構える。
「それじゃあいくぞ！」
「「!!!」」
全員が瞬時に戦闘態勢をとるが既に俺は皆の背後に立っていた。
「いつの間に！」
そして俺はちょいちょいとお腹に指を指して皆に確認を促す。
「「!!!??」」
視線の先には見てわかる位の大きな切れ込みが服に着いていた。
構えている状態から一気にトップスピードに入りすれ違い様に切り抜けを行う技［舞斑雪］を二連続で行うことで全員に同じ痕を着ける
・・しかし、あれなのか。カナンの地でビズリー相手にこれを使うとすれ違い様にラリアットが飛んで来るからあまり使わなかったんだけど
「（もしかして・・あのヴァレッタと呼ばれてたアイツの動きって全力だったのか？となるとあの誘ってるって思った所は全部勘違い？）」

いやまさかそんなわけ・だが実際この戦いで反撃しようと思えば可能で、あの「集中回避」の時ですらまだ反撃の余地は充分にあったわけなんだが。
「うん？」
考え事をしているとき微かな風圧が頬を撫で左手に掴んだ木刀をみた。
その視線の先にはリューが微かに震えており
その後ろにも目線を配ると全員が同じような表情をしている
「ルドガーさん。いえルドガー」
「は・はい」
「もう一戦」
「はい？」
「もう一戦やりましょう」
「は？「いきますよ！」え・ちょ！」
どうやら先程のやり方は気にくわなかったらしく
全員がまた一斉に斬りかかってきた！

因みにこの後二時間ほどぶっ通しでやり続けるはめになった

アストレア様と

「それじゃあお願いね。ルドガー」
「はい・・」
――――――どうしてこうなった
先程の鍛練において全く力を出さなかった事にメンバーが腹をたてアストレア様を四六時中護衛しろと命令され、当然お店の確認もしたかったけど問答無用だった。
「それにしてもルドガー」
「はい？」
「あなた本当に恩恵貰ってなかったのね」
「・疑ってたんですか・・・・」
「疑ってはいなかったけどほら私達神には嘘は通用しないって知ってるでしょ？」
――――――それでも信じられないもの
とアストレア様は鍛練の光景を思いだしジト目で此方を見てくる・・
「ッ!?」
その時突然アストレア様が駆け出し道中にいる負傷者に駆け寄り

「ルドガー！確か貴方治癒術使えたわよね！」
「え⁉っとわかった！」
負傷者の近くに膝立ちになり［ヒール］を唱える
この精霊術であれば身体に負担が小さく済む。が
「っ！くそ！傷口に破片がある！このまま治しても金属毒で悪化する！」
「それとりだせそう⁉」
「っ・・・・・・・このまま治してどうなるか正直解らない」
出来れば破片を取り除いた後で治療するなら後遺症は残ら無いはずなんだが・・
――そう。と覚悟を決めた表情で
「では剣を貸してください。三名・いや二名ほど手足を切断します。そのあと直ぐに治癒術を行って」
「・・・・わかった！」
――それじゃあ、そこの貴方これを歯の間に噛ませて！そしてルドガー！患者を取り押さえていて！
俺の負担大きくないか・・・？取り押さえながら治療術の行使は多分出来なくもないが、まだ術に不慣れだからそれなりの集中力が必要なんだが・・
その視線をアストレア様に送ると笑顔を返される

「（あ・やれという意味ですね・）」
そして一連の準備が整いアストレア様が破片がある所に剣を入れ切断する！
「んーーー!!!　!!んっーー!!!?!」
近くにいるアストレアと俺に帯ただしい程の血が掛かり服を真っ赤に染め上げる
「ルドガー！早く！」
「やってる！」
患者の傷口に［治癒功］を行い癒していく。
［ヒール］といった精霊術よりも回復速度は劣るが充分に回復可能だ。
傷口がふさがるにつれ落ち着いていく患者を確認し
それにともないホッと息をつく俺たち。
アストレア様が周囲にいる手伝ってくれたギルド職員や民間人に労いをかけている
最中
アーディやその姉とは違う青色の髪をした眼鏡の女性が駆け寄ってくるのが見える
「アストレア様！アリーゼ達はいますか！」
「アスフィ？アリーゼ達は今出払っているけど・・」
敵の所在を探るため彼女達の力を借りたい！出来ればリオンの手を！彼女が一番私と連携がとれる！

「確か今それぞれの場所で巡回してなかったか・・?」
「彼は?」
俺がぼやくのを聞こえアストレア様に訪ねるアスフィ。
「彼はルドガー。今家で居候中なの」
「え!?」
俺・・いつの間にそんな扱いに!?
「あーもう!今は猫の手も借りたいぐらいなんです!彼の実力のほどは!?」
「え・・ええ。そうねあの子達が束でも敵わない・・ぐらい?」
「!わかりました!では彼をお借りします!」
彼女は俺の襟首を掴み全力で引っ張った!
「いや!ちょっと待て!今護衛中なんだけど!?」
ねえ!アストレア様!?と彼女を振り替えると
行ってらっしゃーいとでも言いたいのか何処からともなく白いハンカチを片手で振っていた・・
その姿を見て全身の力が抜け為されるがままに引きずられていった。

白髪鬼

「嘘・・・」

私は今夢を見ているのか・今相対しているのは［白髪鬼］と呼ばれる闇派閥の一員の中でも強敵だ。

それが赤子の手を捻るかのように偶々連れたきた青年にあっさりとやれている

どれだけ反撃を試みようとも彼の双剣に受け流され、受け止められ、躱され、攻撃の合間に顔、肩、腕、足とありとあらゆる部分にカウンターをくらい身体に切り傷が増えていく

そして部下である他の闇派閥に指示を出し肉盾にし隙有らば武器をふるが肝心の部下が瞬きをした時には倒されている。また、民間人を人質にする動きを見せた瞬間青年は小さな武器を此方に向けババン！と何かを発射させ敵に命中させる。

一連の事をあっさりと行っている青年は「こんなもんか」とでも言いたげな表情で白髪鬼を睨んでおり

それに怒りの表情を露にし雄叫びをあげながら突っ込むが「遅い」とでも言わんばか

りの速さで顔面に蹴りを叩き込みぶっ飛ばしたところ回り込み身体に踵落としをいれ地面に叩きつける！

「ぐはっ！」

バキッ！という顔の骨が折れる音と共に地面がクモの巣状にひび割れ衝撃が周囲に広がり土煙が周囲に蔓延する

「おい‥アスフィ」

一部始終を私と見ていたファルガーが恐る恐る訪ね

「あいつ‥何者なんだ‥」

その質問の答えは生憎持ち合わせておらず顔を横に降る事で答えた。

「ですが‥言うまでもなくこの場で一番強いのは彼です‥」

――――アストレア様‥貴方は一体何処でこんな人物を見つけたのですか‥

私達は彼によって蹂躙される闇派閥を見ることしかできなかった。

「‥どうやら抜かれたようだな。いや違うな、これは‥」

目の前にいるダンジョンの娘と癇癪持ちのババアの二人とやりあっている最中、他の地区で戦場の音が変わったのを感じた。

「抜かれた訳ではないな、制圧されたと見るべきか」
　　――――私達がいなければ録に仕事も出来のか。雑音共
　いや、それよりも
「貴様らもいい加減しぶといな。呆れるを通り越して感心するぞ」
　肝心の二人は身動き一つ取れない程で無事な所を探す方が難しいほどボロボロだ
　それでも立ち上がろうとする意思は尊敬に値するがな
「ッッ‥‥!アルフィア‥‥!今まで力を温存していたな‥‥!」
「温存？何の事だ。」
「ふざけるな！前回私達を相手にした時はここまでの魔法の威力は無かった！」
「だろうな。今は契約というなの約束で冒険者を通すなと言われている。ならば力が入っても可笑しくはあるまい」
「ッッ‥‥化け物‥」
　　――――出来れば彼方で戦っている奴を見たいがな。
　溜め息をつきつつ目の前の冒険者を半殺しにする
「福音」
　　――――――――――――――――
　教会にて

「おいおい。マジかよオリヴァスのやつ乗り込んであっさりやられてるのかよ」
伝令が暴れようとしたオリヴァスがやられたと報告が上がった。
その報告にハハハと笑い声が自然ともれ、しかもそれを行ったのがヘルメスの所でもアストレアの所でもロキでもフレイアでもない。
「・・・まさかたった一人にやれるとはな」
何でも双剣を主に使用した戦闘を行い見慣れない武器を使用し格闘もかなり出来るときた。
「まさか・・ここまでやるなんて」
――――凄いわあの子。
目の前にいるアストレアが小さな声で称賛をするのが聞こえ
「何だ?お前のところの秘蔵子か何かか?」
「違うわ。秘蔵子でも何でもないわよ」
「?それはどういう」
「だってあの子眷属でも何でもないし、第一恩恵授かってないもの」
「・・・・・・・ッッッ!!!??」
表情が固まる。いつものにやけた顔が作れない。今何と言った・・?恩恵を授かっていない?だが確実にオリヴァスはやられた。あいつをやるには多く見積もってＬＶ４

で同格位だ。
「・・・マジで？」
「マジよ」
　おいおいマジかよそれ。まさかこんなタイミングで現れるとか想像できねえよ。ザルドとかアルフィアにこの話したらどんな反応するかな？
「因みにそいつの名前は？」
「本人に聞けば良いじゃない。あの子店をやってるから」
「店？」
「そう。東のメインストリート付近にあるトリグラフっていうお店」
　その名前は聞いたことがある。そこはザルドとアルフィアに最後の晩餐に行かせた店で、そこから戻ったら毒や病気が治ったと言っていた
「・・・なるほど・・！そうきたか・・」
　――――わかった行ってみるさ
　ついでにそいつの正義についても聞いてみるか

正義について

「さあ、君の正義について聞かせてもらおうか」

白髪鬼と呼ばれた闇派閥の幹部の身柄をガネーシャファミリアに預けアストレアファミリアと合流した後、ヘルメスファミリアが何処からか持ってきた酒やら食料でどんちゃん騒ぎ。

一応俺も料理人として参加していたけど、アストレアファミリアの面々に「何で護衛してないんですか！」と怒られる始末・・・俺は悪くない・・

ある程度の不始末が終わり各自解散していく。

アストレアの面々に店が気になると一言伝え自店に戻ろうとすると、「一人じゃ危ないわ！」と何人か一緒に来ようとしたけど、逆に人数を割く方が危ないんじゃないかと伝え渋々帰ってもらった。

案の定お店は無事だ。

：良かった：本当に良かった。これでまた借金が出来たらと思うと寒気がする：
実際、戦闘の場所は北とか北西とかそっち方面が多いからまあ大丈夫なんだろ。
だけど、ドアノブが軽く歪んでいた。
まるで何か大きな力によって無理矢理抉じ開けられたみたいな歪み方だった。
「……」
念のため、双銃を出現させ身を潜める。
扉を蹴破り中に入る。ガシャン！という音がして扉が壊れる音が響いたが緊急事態だ。：後で直そう：
中には、カウンターにランタンの灯をともし優雅に酒を飲んでいる男が二人と女が一人いた。
「おっと。ようやくきたか」
「ん？ああ、すまないな店主勝手に酒を頂いていた」
「飲んだことの無いものだったが意外と旨かった」
……うち二人は以前来たことのある大男とドレスの女性。後の一人は見たことないが：
「不法侵入って、言葉知ってるか？」
「悪いな、そんな言葉俺の辞書にはない」

余りに堂々と言うもんだから硬直してしまった‥あれなのか。店を開くとこうなる運命なのか俺は‥

「お前の名前は?」

「おいおい。そういうのは自分から名乗るもんだぞ」

仕方ないなやれやれと言わんばかりに嘆息する彼に軽くイラッときた

「まあお前の名前は、アストレアから聞いている。なので始めましてだ。ルドガー・ウィル・クルスニク。俺はエレボス。以後よろしく」

「あ‥ああ」

‥エレボス?どこかで聞いたような‥しかもかなり最近

頭を捻っていると、彼は「すまないな。ちょっと時間がなくてな」と話を続けた

「さて‥白髪鬼を翻したルドガー。君にひとつ聞きたい」

――――君にとって正義とは何だ?――――

「正‥‥義?」

俺は目の前にいる青年に問いかけた。

この青年ルドガーは白髪鬼を意図も容易く翻すとてつもない男だ。しかも恩恵も無しに行った。これは知っている者が聞けば全員が偉業と言うであろう行いだ。
「・・・・・・」
問いかけから二分三分と経つが何も返答がない。
ずっと腕を組み、頭をひねり、唸っている。
「おいおい。まさか何も考えずに戦ったのか？」
――――何かあるだろ人を助けたいとか、見捨てられなかったとか邪魔だったからとかよ
軽く煽るとポツリポツリと言葉を発する
「俺にとっての正義・・・か。」
そうして奴は何かを思い出すように喋り始める。
話を要約すると、奴にとっての正義とは
[自分にとって大切なものを何をしてでも守り抜く]
それだ。
「それじゃあ今回のあれは？」
あの場にはそれらしい人物はいなかった。それでも彼は戦ったが「それは偶々」と否定した

あまりの返答に俺やザルド、アルフィアが軽く噎せた。おいおいマジかよ。偶々とか・・・そんな理由でぶちのめされたオリヴァスが不憫すぎるだろ・・・
実際アストレアの護衛をしていたらヘルメスの眷属に拉致されたらしく
そのあとは軽く摂関されたとぼやいているが
「・なるほどな、それだとお前の見えないところで傷つく多数の人は無視するっていうことになるが？」
「それに、何をしてでもとなると自分の命さえ惜しくないと聞こえるが」
今まで傍観していたザルドとアルフィアが口を開く。こいつらの目的は黒龍を倒す人物を作るため何だが、このルドガーに対して気になる点があるらしい
「・そうだな・・・俺の選択によってはそうなるかもしれないけど、後悔さえしなければ大丈夫かなって」
・・・まあ実際、それやって一度死んだ身だし
「!?」
「おいおい・どうしたお前ら」
ザルドは度重なるレベルアップにより五感が著しく成長しているから、この距離の声なら難なく捉える事が可能で、アルフィアは音を主とした魔法を使う影響かザルドと同じく聴こえたみたいだ

「おい貴様。もう一度いえ」
「え‥今の聞こ「早く」えたのか‥」
　　――――1度自分を犠牲にして大切な人を守ったよ
「!?」
　今度こそはっきりと聞こえた。ハハハ‥マジかよ
「‥‥嘘は言ってない‥」
　声が震えた。神としての能力に疑いを持ったのは始めてだ。
「‥‥なるほど、こういう人物こそが英雄と呼ばれるのかもな」
　彼の小声が聞こえた辺りから目をつむりなにかを思い出すように言葉を紡いだ。
「もし英雄と呼ばれる資格があるとするならば、剣をとったものではなく、盾をかざしたものではなく、癒しをもたらしたものでもない」
　　――――己を賭したものこそが英雄と呼ばれるのだ
「‥‥俺のありがたい主神の言葉だ」
　おそらく狒々爺の好好爺のことだろう。‥全くまさか目の前にそんなのがいるとかあり得ないだろ‥
　しかもこんな二十歳‥位か？の青年に何があったんだよ詳しく聞きたいが‥
「おい、エレボス時間だ」

「おっと、もうそんな時間か‥」
ザルドとアルフィアが席を立ち玄関に歩き始める。
「さて‥ルドガー君、君の正義を聞かせてくれたお礼をしなくちゃな」
――――――そうだな‥戦いの強制参加だ。
その言葉に反応し目の前に剣が閃くが
「ふん!」
近場で待機していたザルドにより金属音が鳴り響き弾かれる。
‥‥いや、マジで危なかった。少し対応遅かったら送還されてたな‥
「‥ザルド‥‥少し遅せえよ」
「いやすまん。思いの外早かった」
「全く‥‥さてアルフィア。彼を盛大に飛ばすか」
「一応聞くが、何処にだ?」
「そうだな‥‥バベルでいいんじゃないか?」
「わかった‥［福音］」
剣を弾かれ体勢を立て直し此方の出方を伺い距離を取る青年は音の暴風と共にここからでも見える塔の方面に飛ばされていった
「‥‥今の［魂の平静］切って放ったろ」

「そうでもしないと行きそうに無かったのでな」
簡単に想像できるのが変だが彼なら本当にやり遂げそうだ。そして俺は二人に向き直り宣言をする

「さて、お前ら［絶対悪］を始めようか」

決戦まで・・

「(・・・ッ!)」

身体が音か風に飛ばされバベルの広場に接触間近、体勢を立て直し双剣を地面に突き刺しスピードを緩める!

ガガガ!!という地面が削れる音が周囲に鳴り響く。

「クソっ!」

自分が飛ばされた方角を睨み悪態が自然と溢れる中、周囲からの視線がひしひしと伝わる

「・・・・・・・?」

周りには冒険者らしき者達がずらりといて、凄く此方を見てくる・・・何だ?この集まり

「・・・何やってるのルドガー・・」

「それは此方の台詞何だけど?」

アリーゼはもうじき決戦が行われるからそのための決起集会をここで行っているこ

とを教えてくれた。そしてもうちょっとで終わるって時に俺が飛んできたみたいだ
「‥‥タイミング悪かったな」
「タイミング悪い以前の問題よ！だからあの時一人二人護衛をつけようとしたのに！」
　いや多分いたとしても‥変わらないか更に面倒な事になっていたかのどっちかだな。断言できる
「何を納得しているのかわからないけど！此方の質問に答えてもらうわ！何やってたのよ！」
「‥あー‥‥なんだろ。問答？」
　問答ってなによ！と詰め寄ってくる。‥実際［正義］について問われて答えたらここにいる。間違ってはいないよな
「すまない。ちょっといいかな」
「‥‥この人は？」
「‥そっかルドガー全く知らないわよね。この人はフィン・ディムナ。ロキファミリアの団長にしてこの集まりのトップよ！」
　その説明に「ハハハ‥」と苦笑しながら答えてくれた。いわゆる小人族って言われる人種なのかな‥なんか見た目とのギャップが凄そうな人だ
「はじめまして。僕はフィン・ディムナ。所属とかはさっき彼女が言ってくれた通りだ

よ。」
「これはご丁寧にどうも・・ルドガー・ウィル・クルスニクです」
「よろしくルドガー・・それで君は何処に所属しているんだい？」
所属というとファミリアの事だよな・・していないって言うと厄介な事になりそうだな・・
「あ・・アストレアファミリアにお世話になってます・・はい」
一応はアストレア様公認だ。間違えてはいないよな。うん
なるほどお世話・・お世話か・・と目の前の少年が呟き俺を疑いの目で見てくる。
それにあわせ、後ろの方で「ルドガーって家でお世話してたっけ？」「さあ？」「私も詳しく聞いていないな」「まあ、嘘も方便と言いますし本当にしても問題ないのでは？」と小声で話していた。
やばい・・色々終わったあとの行き先が決まった気がしてきた。
「まあ詳しくは聞かないよ。それよりさっき東から飛んできたけど何があったんだい？」
「えっと・・多分だけど［音］か［風］に飛ばされた？」
「・・・ッ因みにその時何か聞こえなかったかい？こう・・鐘の音みたいな。」
「聞こえたと思う・・」

それが何かと問いかけたところ直ぐ様周囲の冒険者に指示をだし東の偵察に何名か行かせた。
「‥‥?」
この慌てように頭を傾げていたとき、輝夜とライラに肩をグイっと捕まれ
「おい！貴様、あの女とやりあったのか!?」
「てめえ、やったにしても何でそんな無傷なんだよ！」
話を聞くに昼頃アルフィアと呼ばれる灰色の髪をしたドレスの人とやりあったらしい。その時ボコボコされたみたいだけど。
「何でって‥こう、魔法っぽいのが出るのと同時に全力で後ろにとんで威力を削いだからかな?」
「それじゃあ！あの三半規管があっという間にやられる音はどうした！」
「多分あったけど、すぐ治ったかな?」
顎に手をやりながらさっきの光景を思いだしあれやこれやというと
「‥駄目だ。こいつも十分化け物だ」
「全く参考にならんな。この怪物め」
何を失礼な。俺以上の化け物とかいるぞ。例えば‥‥闘技場の四人は化け物だったな‥‥。あの四人いればビズリーとかクロノスとか完封できそうな位に。

「まあいいわ！そんな事よりも貴方がここにいるってことは一緒に行動するのよね！」
「そうだな、乗り掛かった船だし一緒にいくよ」
その言葉に俺の実力を知っている面々はグッとガッツポーズをつくり「やった！」と喜び様を見せた。
その様子に表情が緩む。さっきまであんなに険しい顔だったのに今の喜びようときたら、勝ったも同然みたいな様子だ。
「（いざとなれば骸殻も使うんだけど）」
ポケットにいつも入れてある真鍮色の懐中時計を手にバベルを見据えるが安易に使うと今の状況が更に悪化するのではという、予感もあった。
「（使わないことを祈ろう）」
「すまない！ルドガー！ちょっと聞きたいことが！」
「あ・ああ！」
フィンに呼びだされ、俺に何があったか詳しく訪ねてきた。そこにいた人物や話した内容等々。
流石に全部を話すわけにもいかないため、ザルドとかエレボスなる人物がいたことを伝える。
「なるほど、状況を察するにもういないだろうな。わかった。ありがとう」

そして、各自作戦内容の把握や役割分担等の打ち合わせを行い準備を万端にしていき
夜が明けてき決戦が間近になり
闇派閥とオラリオの面々の咆哮が鳴り響いた
これより正邪決戦の火蓋が切って落とされる

突撃

バベルの下。即ちダンジョンに赴いた俺達ロキファミリアとアストレアファミリアの面々は足下からくる地鳴りに襲われながらも階層を下へと進んでいく。

道中モンスターにも当然のように接敵するが、金髪の少女アイズと呼ばれる子が狂戦士のように敵を蹴散らしていった。

「‥あの子凄いな」

「流石と言わざる負えないがあれは［剣姫］というより［修羅］だな。」

［剣姫］？と輝夜に聞くと「二つ名の事だ」と言い、何でも冒険者はレベルアップすると神様達から与えられるらしい。

「しかもあれまだ十も満たない齢らしいぜ」

「ええ‥‥」

十っていうと‥確か初めて兄さんに料理を作った時辺りかな‥‥あんなに幼い子がどうなってるんだ？‥この世界。

「（まあそんな幼い子に全部任せる訳にはいかないっな!!）」
　両手に双銃を出現させババババババ!・という銃声と共に少女の邪魔にならないように注意しながら周囲の敵を一掃していく。
　その音に一緒に来た面々が一斉に此方を見てきた・・その視線を横目に、風の属性を付与させ貫通力を高めた銃弾で直線上にいるモンスターを一掃し、片方の銃で闇の力を付与させた銃弾で相手を引き留め隙をつくりだし、もう片方でその隙を狙い打つ。
「ちょ!・ルドガー!・タンマ!・」
「え?・どうした?」
「皆見てる!・見てるから!」
　なんでも事前にアストレアファミリアは予め銃の事は聞いているからなんともないが、他のファミリアはそうはいかない。実際緑髪のエルフや以前出会ったガレス、そしてアイズにも此方をじっと見ていた。
「えっと・・使わない方がいい?」
「・・いや、使ってもいいけど他の無い?」
　それじゃあ・・双銃から双剣に瞬時に切り替えると「ええー・・」と言う周囲の声を聞きながら右手の剣を地面に突き刺し全力で相手に向け
　その時に生じる衝撃波が地を這い相手に着弾する。

それに続け左の剣も同じように準え第２の衝撃も相手に着弾する
それが１体や２体ならまだしも何１０体も一斉に吹き飛んだ。
「‥ねえルドガー。本当に‥ほんっっっとうに！恩恵持ってないのよね!?」
アリーゼが両肩をガシッと掴み念を押すように聞いてくる。
「？いやこれぐらい皆も出来るだろ？」
「「出来るか!?」」
この技を少しのコツを教えてもらったら出来たことを伝えたら「出来るわけ無い！」と怒号が響き渡る。
その事を聞こえたアイズが地面に突き刺しさっきと同じ事をやろうとしていたが出来なかったのかしょんぼりしていたのが見えた。
「お願いだからルドガー‥もうちょっとマシなのない？出来れば精神的に安心できるもの！」
――――ええ‥じゃあと双剣からハンマーにまたもや瞬時に切り替えると「‥‥もうやだ」という言葉がまた聞こえる。
ハンマーを地面を強く叩き衝撃を流すことで敵に氷塊を隆起させ相手を氷付けにし砕く。
「「ハッ？」」

それに続け様にハンマーを大きく振りかぶり、火を纏わせ相手に投げつける。
パシッというキレイに帰って来たハンマーを持ち直し「これでどうだ？」と皆に向き直ったが・・
「「・・・・・・・・・・」」
全員が白い目で見ていた。
一方でロキファミリアは「ガレス・・あれできるか？」「出来るかあんなもん」「衝撃のヤツ後で教えてくれるかな・・？」等と話していた。
「えー・・と。皆！ルドガーが道を拓いてくれたわ！この調子で行きましょう！」
アリーゼが白い目で見ていた面々に号令を掛け先へと進んでいく。
・・どうやら。俺に関してはノータッチの方向みたいだ。すれ違い時に、「頑張れよ」「骨は拾ってやる」「御愁傷様」等と言われたが何の事かわからず首を横にする
「ねえ・・」
「？なんだい？」
「さっきの衝撃のヤツ教え「こらっ」ふぎゅ！」
アイズがさっきの［魔神剣］について教えて欲しかったみたいだが緑髪のエルフに止められた。
「すまないな。突然」

「いえ。お気に為さらず」

――――全く‥聞くなら後にしろ。私だってあの魔剣と思わしき武器について聞きたかったが我慢したのに。

去り気に銃について聞きたかったと微かに聞こえ後の質問攻めについて考えておくべきかと思ったやさき、背中に強い衝撃が走った！

「ごふっ!?」

後ろを見るとガレスさんが俺の背中を叩いたみたいだ。しかも凄い笑顔で。

「いやーこの場面に出くわして良かったわい！。お主のような輩に出会えたからの！」

――――ほれ！早くいくぞ！でないと置いていかれるぞ！

その言葉にハッ！と急いでアストレアメンバーに追い付くよう走る！

その最中、さっきの技に違和感があったのが脳裏にちらつく。幾らなんでも威力が大きすぎた。特に魔神剣があまりにも顕著でなん十体も吹き飛ぶような威力は出したことはない。

「(なんかこう。何かこう変な後押しがあったみたいな‥)」

その事を思いつつ足を動かし先頭に走った

下に降りる度、周囲の背景が変化しつつ地鳴りが大きくなる。
なんでも目的地である１８階層が目前でそれに伴い酷くなっているみたいだ。
そうして開けたところに赴くとそこは焼け野原だ。
「１８階層てこんなところなのか？」
「っ！そんなわけない！ここはもっと美しかった！」
「ていうか・・本当にここはダンジョンなのかよ。こんな光景・・拝んだ事なんか無いぜ・・」
その時地面が爆発した。というより地面から火柱が立ち上る。
それを受けた階層のモンスターが火だるま状態に為りながら襲ってくる。
それを受けるわけにもいかず双銃で周囲を一掃していく
なんでも、この火柱の正体は［竜の壺］と呼ばれる５２階層の攻撃に似ているみたいだが、今から現れるモンスターがこの現象を作ってるみたいだ。
モンスターが現していない最中に陣形を建て直そうとすると
「余計なことはするな」
その時聞き覚えのある女性の声が耳に入った

静寂

その言葉が聞こえた瞬間靴の裏が視界に現れた。

「うおっ！」

ブォン！と蹴りが風圧を生む程のスピードで放たれ、ギリギリのところを上体を反らすことで回避しバク転バク宙と繋げ距離をとる。

元居た所には脚を構え残身をとっている灰色の髪の人、アルフィアがいた。

「ふむ。一番厄介なヤツをさっさと仕留めようとしたが失敗か‥」

――――――なら……

その瞬間アルフィアの姿がその場から消え、手刀が胸に突き出されるように放たれる。

それを身体を回転させて逸らしその勢いで蹴りを放つが残った手で受け止められる。

「うおおおおお!!!!!」

一瞬動きが止まった時をガレスさんがその身の剛腕で斧を振り下ろすが

「邪魔だ」

「ぐはっ！」という言葉と共に一蹴された。
その隙を狙い地面をハンマーで全力で叩き土煙を周囲に撒き散らす。
その煙に紛れ距離をとり、アストレアの面々と合流する。またアルフィアも後退し微かな余裕が生まれた。
「ルドガーさん！無事ですか?!」
「ああ！なんとか！」
「全く！突然襲うとかあり得ないわよ！あと御免なさい！全く動きが見えなかった！」
それはそれでどうなんだ!?アリーゼの言葉に唖然とするが仕方無いのか?という気持ちも沸く。
「でも：私達にはとっておきがあるからなんとかいけるわよ！多分！」
「ならさっさとしたらどうだ?こうしているのは只の気紛れということを忘れるなよ」
まあ確かにさっきの速度を見れば、この距離なんて1秒あれば詰められる。
「わかってるわよ！さあ皆行くわよ！」
「「同調開始！［リンクオン！］」」
是によりリオンとアリーゼ。ライラと輝夜がリンクを繋げる。
「!!」
空気が一瞬変わったのを感じたのかアルフィアが少し身構えるが

「「遅い！」」
リオンとアリーゼが風と炎の力を巧みに使い上空に打ち上げたところを連撃をし最後に下からのカチ上げと上からの攻撃で挟撃を行う！
「・・・！」
案の定その挟撃はかすり傷が入った程度に収まる。だが意表はつけたみたいだ！
「輝夜！私たちもいくぞ！」
「ああ！あいつらだけに任せてたまるか！」
二人はアルフィアのところで交差するように走りだし十字に切り裂くが
「甘い」
と頭を抑えられ止められる。
それに追撃するようアリーゼとリューが攻撃に動きだすがそれも叶わず
「福音」
その一言で彼女の周囲に音と風の暴力が現れ全員が吹き飛んだ。
「！［開口、無窮に崩落する深淵］！」
俺の周囲に精霊術特有の陣が形成される。
「［グラヴィティ!!］」
アルフィアの上空に敵を引き込む重力場が形成され効果範囲を荒らすが

「［魂の平静］」
その一言で呪文が消え去る。
「そんなのありか!?」
ポンポンと服についた埃を払いつつ、此方を見据えて
「なるほど、私と殆ど同じタイプか。前衛、中衛、後衛が可能と」
――――――では、先程の続きだ。
またもや、瞬時に目の前に現れありとあらゆる攻撃を仕掛けてくる。凄まじい速度で放たれる手刀を辛うじて回避するが、そこから繋げてくる蹴りや投げ、全てが必殺であり、少しでも気を緩ませたら此方の命が紙のように吹き飛んでしまう。
それに対抗し、二種の武器を巧みに扱いどうにか凌いでいく。しかし一刀で高速の連撃を行うにしても、二つの剣を一刀に重ね叩き割るにしても、ミラに教わった舞うような斬撃も、彼女にはかすり傷が程度だ。
唯一まともに入ったのが、ハンマーで爆弾を放り投げる［アンスタブル・マイン］を目の前で爆破させることや、地面を柄で強く穿ち隆起させる［デストリュクス］といったほぼほぼ自爆攻撃だ。
「（銃なんか出す余裕無いんだが!?）」
「詠唱が終わった!・その場から離れろ!」

後方にいるエルフからの指示が聞こえたが、彼女からの連撃の対処でその場から動けそうにもない。
「さあ。この状況からどう対処する？」
足下から魔方陣が現れ強力な技が来るのが確認しなくてもわかった。
「（これしかないよな‥！）」
頭の上でハンマーを回転させ周囲にシールドが形成される。
それと同時に周囲にとてつもない魔力の火柱が立ち上ぼり俺もろとも焼き付くそうとしてくる。
「その隙を待っていた」
その言葉が聞こえたときには凄まじい衝撃が鳩尾に走り何度も地面を跳ね壁に衝突し、意識がとんだ。

「まあ‥なかなか手強かったな」
それで？やっている間全く手を出さなかった貴様らはどうする？
目の前に少々火傷あとや埃、切り傷が出来た化け物が問いを投げてきた。
「ええ‥どっちかっていうとルドガーに引くんだけど。何で傷を負わせること出来てる

のよ。」
「それはどういう意味だ？」
「実はですね。リヴェリア様・・」
　何も事情を知らないリヴェリア様にルドガーがＬＶ１相当なのを説明した。幾らなんでも恩恵を授かっていないとは言えず、あくまでも一時的な対処としてその様に話す。
「なんと!?あやつレベル１にも関わらず手傷を負わせたのか!?」
「っ!?いやいや!?あり得ないだろ！先程の魔法ですら見たこと無いものだったんだぞ!?」
「大丈夫です！私たちも見たこと無いから！」
「「同じく！」」
　これでルドガーが恩恵授かったときにぶっ壊れな性能になるのは間違いないのは確実なのよね！
　というか、把握する方が難しい位なんでも出来るわよね！彼！
「さあ、一番強いヤツが暫く退場だ。ここから巻き返してみせろよ。雑音共」
「なんの！ルドガー一人だけじゃないってところ。見せて上げるわ！」

夢と選択と覚悟

夢を見た。
それは兄さんと最後の戦った時の夢を
「甘いぞ！ルドガー！そんな事で審判を越えられると思うな！」
逆手に持った双剣が何度もぶつかり金属音と共に火花が散り、今まで培った双剣術や体術が目に見えない速度で繰り広げられる。
すれ違い時の切り抜けや一刀の元に行われる連撃、雷を纏った技と、まるで鏡のように全てがそのまま二人の間で行われる。
「骸殻は人の欲望の糧によって変化する！ルドガー！お前の選択と覚悟を俺に見せてみろ！」
その時兄さんの骸殻がハーフからスリークォーターに変身することで更に力、速度、全ての能力が向上する！
祓砕斬！十臥!!
!!

凄まじい速度ですれ違い様に切り抜け、切り返しを行い溜めに溜めた双剣のマナを十字に繰り出す！

「ああ・・・この夢か・」

この光景を見てこの後の展開を思い出す。

「懐かしいか？ルドガー」

懐かしい声が後ろから聞こえバッと振り向くと白のコートを着た兄さんが立っていた。

「兄さん!?何でここに」

「なにもないだろ。あっさり気絶した弟を叱りにやって来ただけだ。」

――――なんだ？あのふがいなさは。

あう。と情けない声が自然と漏れる。

「全く。仮にも俺とビズリー、はたまたクロノスを倒したんだろ？あれぐらい何ともないだろ」

「あ・はは・面目ない」

「それともなにか？本気出せない事でもあるのか？まさか・鈍っているとか言わないよな？」

「・・・そのまさかです・・定職につけたのが嬉しくて結構サボってました。流石に全盛期には戻ってないかな・・」
「ったく。お前というやつは」
ガシカシっと頭を強く押さえつけられながら乱暴に撫でられる。
「まあ俺はともかくビズリーとクロノスを倒したのは仲間との連携があったからこそ出来たのかもしれない。でもな、異世界に飛ばされたからといって、仲間との縁が消えるとは思わないことだぞ」
――――見てみろ。予想以上にお人好しみたいだぞ?お前の仲間は・・
兄さんが指を指した方を見ると、そこには嘗ての仲間が一同に会していた。
ジュード、アルヴィン、エリーゼ、レイア、ローエン、ガイアス、ミュゼ、そしてミラ。
身体が若干透けているためか声は聞こえないが意思は何となく伝わる。
そしてとうとう兄さんの姿も透けて見えてくる。
「おっと。そろそろか・・」
「・・・お別れかな・・」
「いや・・お別れなんかじゃないさ。俺はいつだってお前と一緒にいる」
――――そうだ。最後に一言言っとくぞ。

兄さんは俺に背を向け真っ白な所に向かって歩き出す。
「ルドガー。これはお前だけの物語だ。誰の選択によるものではなく、お前が選択し答えた結果の世界だ。だからな、ルドガー：後悔する選択だけはするなよ」
――――――お前はお前だけの世界を創るんだ。
その言葉と共に視界は白く塗り潰されていくことと共に、兄さんの姿が見えなくなる。
「ありがとう！行ってくる！」
目元に浮かんだ涙を拭い最愛の兄に感謝を述べその場を後にする。

「・・・いい加減！起きろ！」
「グハッッッッ!?」
腹にとてつもない衝撃が走る！
そこにはさっきまで見てた白の景色とかではなく、焼け野原であり、遠くにはアルフィアとボロボロのアストレアファミリアとロキファミリアの面々が戦っている。
そして、起こしてくれたのが和服を着た黒髪の輝夜であり、どうやら全力で殴ること

により意識を戻してくれたみたいだ。
「‥ゲホッ‥コホッ！‥ああ‥起こしてくれてありがと‥でももうちょい優しくても良かったんじゃない？」
咳き込みながら感謝を述べると「あ〟ぁ!!?」と女性らしからない声が輝夜の口から出てきた。
「お前がいつまでたっても起きないから折角起こしてやったというのに！もう一度眠りたいのか!?」
「あ‥いや。すみません。ありがとうございます‥‥」
――――戦況は？
と彼女に訪ねると表情がしかめっ面になり芳しくないらしい。幾ら攻撃しても有効打が与えられず、こっちがものすごい勢いで消耗していくだけの泥仕合になってるみたいだ。
「なるほど‥な。わかった。それじゃあ一発かましてくる！」
「ああ‥ってちょっと待て！お前一応さっきまで気絶して‥って早！」
両手にハンマーを持ちながらも走るスピードは衰えることなく戦闘中の上空に躍り出る！
その様相に気づいたアルフィアは全員を一度吹き飛ばそうと魔法を唱えるが、一歩遅

かった。
「いくぞ！［ジュード！］」
『ＯＫ！ルドガー！』
「『臥竜裂渦!!!』」
　実体があるようで無い、半透明のジュードと共に地面を全力で穿ち抜き周囲に間欠泉のような水飛沫を発生させる！
「っ!!!」
　それを辛うじて翻す事で回避したアルフィアはすぐさま距離を詰め攻撃に転じた。
「（その反応速度には惚れ惚れするけど！）」
　ジュードと共に地面に闘気を広範囲に伝える共鳴技を発動する！
「『獅儘封吼!!!』」
「チッ!!」
　技の厄介さをうっすら感じ取ったのか大きく後ろにジャンプすることで回避する彼女。
　あのまま受けていたなら気絶なりなんやりするのにな。もうちょっと隙をつかなきゃ駄目か。
「貴様先程とは動きが違うな・いや。正確には戻ったといったところか」

――――――――おそらく同じメンバーで動きに付いてこれる輩がいない事から生じるソロでの戦いといったところか。
「そして、どうやら気絶したことで何かしら力に目覚めたか?まったく、本当に英雄の復活劇でも見ている気分だ」
その時、アルフィアの口元が微かに上がり笑みを見せたような気がした。
「ルドガー!?意識が戻ったのね!」
「ようやく復帰か!?この野郎!」
「ルドガーさん!ご無事でなにより!」
「ああ。皆待たせてすまない・・・って凄いボロボロだな」
――――――ルドガーが気絶してから酷いのなんの!もう容赦が無いのよ!ビックリするぐらい!
その言葉を発する彼女は若干涙目で申し訳なさが微かに沸いてきた。
「それじゃあこれで勘弁してくれよ!」
ジュードと共に治癒術を共鳴させ周囲に緑のオーラが広がり
『リカバーヒール!!!』
アルフィアを除く全員の傷が瞬時に塞がっていく。
「え!?凄!ルドガーやっぱり貴方も化け物じゃない!」

「誰が化け物だ!?」
「いや。充分ワシから見ても［静寂］にひけをとらんぐらい化け物だとおもうぞ！」
「すまないが、私も同意見だが味方ならこれ以上無いほど頼もしい存在ではある！」
傷が治り戦線に復帰していく冒険者達。各々が武器を構え眼前にいる冒険者を見据えていく。
「漸く本番か。せいぜい気張れよ。冒険者共」
その言葉を切っ掛けにそれぞれが自慢の武器、技、魔法を目の前の敵をぶちのめす為に放たれていく。

違和感

「‥‥時間切れか」

眼前の灰色の髪の人は戦いの最中そう言った。

俺を含め戦闘に参加していたファミリア全員は満身創痍という言葉が似合うぐらい疲弊しているが、アルフィアもそれなりに傷を負っている。

若干の火傷、避けきれずに負った切り傷、打撲の跡。

来ていたドレスがまあ‥なんというか若干目のやり場に困る位ボロボロになっている。

「(それよりも、なんか‥‥俺と戦うときだけウキウキしてなかった!?)」

他の面々は［福音］や［魂の平静］［ルギオ］の一言で済ますが、俺が接近したときはスッゴイ笑顔で手刀や足刀、投げ、しまいには手に魔法を込めて殴って来る始末だ。

共鳴技を使い追い込む事は出来たが、何度も繰り返す内俺をブッ飛ばせば連携には繋がらない事に気付き俺への当たりが激化した。

「『時間切れ』とはどう言うことだ?」

「なに、エレボスに少しワガママを言ってな」

――――例の青年と少しやらせろとな

「案の定、想定していた時間よりも速く着いたようだから時間まで遊んでいたと言うことだ。」

それよりも下からくるぞ本命がな。その直後に一際大きい地面の揺れが始まると同時に階層の中心に火山の噴火の如く吹き出す！

「まずい・・・！とうとう・・！」

地面の揺れを生み出していた怪物の正体が姿を現す。

それは黒の異形。筆舌に尽くしがたいモンスターが現れる

「・・気持ち悪！」

嘗て戦ったギガントモンスターの紫のブドウ球菌並みに気持ち悪いのが出現し、つい言葉が漏れた。

その時アイズに異変が起きる。

「・・・・・・ふーっ、ふーっっ・・・!!」

――――あれは・・！あれはっっ!!

そして、「うあああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」と叫び異形のモンスターに特攻していった

完璧に暴走しておりこのままだと敗北必須の状況に陥る。

その様相を見たアリーゼはガレスとリヴェリアに助けに行くようお願いをし、アルフィアを此方で請け負うと宣言する。
「出来ればルドガー。貴方はアイズを助けにいって」
「・・・いいのか？」
「本音は此方にいてほしいのだけど、さっきの戦闘を見ると貴方に攻撃が集中しそうだからカバーが難しくなりそうなのよね・・」
「わかった・・あっちを速攻で終わらせるからそれまで頑張ってくれよ！」
任された！とその言葉を尻目に異形のモンスターとの戦闘に入る為その場を離れ、ガレスやリヴェリアの元に急いだ。
「お主も此方に着たのか！」
「状況は!?」
「どうやら、アイズの風が唯一の有効打になりそうだ。火や雷は自動的に回復する！」
波状攻撃さえ与えればどうにか魔石までいけそうなんだが・・
「ん？波状攻撃さえ与えればいいんだよな？」
「あ・・ああ、魔石さえ見えれば後は此方で対処するが・・出来るのか？」
「ん・・まあ多分・・出来るかな？直ぐ露見すると思うから準備しといてくれると有り難いかな」

「‥っ！わかった！直ぐ行おう。ただアイズを巻き込まないでくれよ！」
巻き込まない‥巻き込まないで倒すとしたら遠距離は除外するとして、近距離の方が巻き込まないよな‥
「儂は防御に徹するとしよう。本当に頼むぞ若いの」
「ああ。任せろ！」

その場から離れアイズの元に向かう。
彼女は、風を身に纏い件の怪物と争っているが圧倒的不利な状況ように見える。まともな判断が出来ずに冷静であれば余裕で回避できる場面でも特攻していきダメージを貰っているといった様相だ。
「危ない！」
「っっ!?
!!」
危うく壁に衝突しそうなところで身体を抱えることに成功してその場から離れる。
「っっ!!離して！離してってたら！」
「っこら！暴れるな！」
それでも尚、例のモンスターに挑もうと腕の中で暴れ続けるアイズ。
そんな彼女を落ち着かせる手段が思い付かずつい口からでたのが

「っ！後で、衝撃のヤツ教えるから！」
「それ本当!?」
グリン！と目の横に星が見えるぐらい笑顔で此方に振り向き動きが止まった。
「あ・・ああ、本当・・だよ・・？」
「・・やった！」
両手を突き上げやったやった！と戦闘中と思えない位はしゃぐアイズ。さっきまでの殺気とか狂戦士具合は何処に消えたのか
ここら辺は年相応なのかと苦笑し彼女にリヴェリアから聞いたことを説明し準備に入ってもらう。
「さて・・いくぞ！［ジュード！］」
『うん！ルドガー！』
隣にジュードを出現させモンスターの懐に瞬時に入り込む。
二人同時に敵を上空に打ち上げる位強い打撃を与え周囲を連続攻撃を行っていき、あまりの連撃により嵐が形成される！
『風、織り紡ぎ、大地を断つ！』
その二人の激しい攻撃によってモンスターの体表はみるみる内に削られていき先程迄の恐ろしい姿は見るも無惨な形に成り変わっていく！

「『天招！』」
猛烈な連撃の止めに二人同時に蹴りを放ちモンスターを嵐の真ん中に叩き落とす！
「『風縛刹！』」

その時上空から地面に走る光と共に１８階層が先程と比べ物になら無い激しい地面の揺れに襲われた。

間近？

「ッッハァ・・・ハァ・ッー」

凄まじい連撃の後の後遺症か、目眩がするほどの息切れが身体を襲うと共に気絶後の高揚感が身体から抜けていく。

土埃が激しくモンスターの姿が見えないが手応えはあった。最後の蹴りを放ったとき何かを砕いた感触と息の根を止めた感覚が身体にこびりついたからだ。

（・・ハァ・・ッッ全く・・この感触は余り好きじゃないのにな・・って、散々世界を消してきた俺が言えた事じゃないな・・）

今でもたまに夢を見る。あの兄さんを貫いた時の感触と世界を壊した時・・そして、分子世界で仲間が時歪因子の時だった事をだ。

あの時はエルを心配させないが為に無理矢理気張っていたが・・ジュードやレイア等の面々にもろばれみたいでカウンセリング紛いの事をして貰って誤魔化していた。

特に顕著だったのが兄さんを貫いた時だ。あの時ほど身体が不調になった事はない。

実際、分子世界から戻ったときはもう会えないって考えるだけで涙が止まらなかっ

た。
カナンの地の道を進んでいるとき、自分がどんな顔をして戦っていたのかわからないぐらいだ。
叫びながら戦っていたのかもしれない。
泣きながら戦っていたのかもしれない。
何も考えないように戦っていたのかもしれない。
只唯一わかるのが仲間の目を見れなかったと言うことだけだ。
そして、自身の乱れに乱れた呼吸を整えると後方からリヴェリアと呼ばれていたエルフとガレスさん、アイズが駆け寄ってきた。
「おい！大丈夫か!?」
「ああ・・なんとか・・ね」
その反応に手を胸に当てホッと一息ついた彼女は安堵したのか呆れた表情で「私の出番いらなかったな」と続けた。
「だが・・本当にやったのか?」
「魔石がまだ残っているならもう再生していてもおかしくはないと思うのじゃが・・出てこんな」
「・・そうだな・・最後の一撃を放ったとき何かを砕いた感触があったから・・多分その魔

石‥?をやったんだと思う」

あの時の感触を説明すると袖を引っ張られる感触が伝わった。そちらに視線をやるとアイズが魔神剣を教えると伝えたとき以上に目をキラキラさせていて、何故か微かに冷や汗がでてきた。

「え‥と‥どうしたの?」

「さっきのも!教えて!」

「いや‥ごめんあれは無理」

ガーン!!と目のキラキラが一気に消えたのがハッキリと顔に書いてあった。

まいったな‥教えたくとも教えられないというか、1人で出来ないというか、もう出来そうに無いというか‥なんて説明すればいいんだ?

その時パチパチパチと拍手する音が聞こえ、その音の発信源は俺の店で無銭飲食を働いたエレボスと呼ばれる神だった。

「いや〜見事見事。まさかあのモンスターをこうも速くぶちのめすとは」

「こりゃ俺の見立てが甘かったな」と反省したのかしていないのか中途半端な表情で称賛の言葉を紡いだ。

「因みに聞くが、あれが最後の秘策という事でいいのか?」

「ん～そうであり。そうでもない・・かな?」
「それはどういう?」
「いや～こればっかりは俺も予想外でな・・ちょっと困ったことになった。」
――――だから助けてくれ。と今までの傲慢が消えたかのように助けを求めてきた悪神。
「「ハア?・」」
この反応は俺達が絶対に正しい。そう思い訳を聞こうとすると、彼は俺達とは別の方向に指を向け「あそこを見ればわかる」と示したのは・・・・
「・・・なんじゃ・・あれは・・」
「骨の・・モンスター?」
「・・気持ち悪い・・」
それは骨のようなモンスターで全長は・・なんぼだ?１０Ｍいかないぐらい?あとは・・手足の関節が逆になってるのか?
その怪物が凄まじいスピードで白い装束の闇派閥を一掃していた。
「一応アルフィアにも聞いてみたが見たことが無いそうだ。今は俺の部下を餌にしてどうにか気を引いてるがもうじき此方に来るだろう」
「アストレアファミリアは!?」

「安心しろ。今は全員気絶して上層に運び込まれてるはずだ。」
いや～病気のないアルフィアはマジで化けもんだわ。もうビックリするぐらい。お前があのとっておきに向かっていったらアストレアファミリアを瞬殺だぜ？んで、死んだら目覚めが悪いって事でアルフィアはあのモンスターを確認した後上に行ったぞ。
「因みに部下曰く、剣、魔剣、全く通じないどころか跳ね返してくるらしい。それも盾で爪を防ごうとしたところで身体が盾事真っ二つよ。どうしたもんかね・・」
「武器が通らない・・」
「魔剣が効かない・・となると魔法も効かないと見るべきか」
「防ごうとしても駄目・・ときたか」
「無敵じゃないか!?」
「そう。ぶっちゃけ打つ手無し！だから秘密に満ちているそこのルドガー君にどうにかしてもらいたいわけよ」
――――だから頼む。その今までの印象では飄々としなにがあってもその態度は変わらないような神と想っていたが、今目の前にいる彼は頭を下げ懇願している。
「・・この後貴方はどうなるかわかるか？」
「十中八九送還されるだろうな・・」
「それについて思うことは？」

「特に無いな」
「‥わかった。但し条件付きでだ」
条件?と首を傾けるエレボス。彼は確かに大勢の人を巻き込み、更には大勢の人の命を奪った。これは変えようのない事実だ。
だからこそこういうやつにはこんぐらいの罰で充分だ
「ある二人を説得してほしいかな‥丁度俺の店人手不足なんだ。ついでに、酒代分働いて返してもらうぞ」
「‥お前まさか‥くっ!!アッハハハ!!!OK!わかった!その条件受けた!」
腹をかかえて笑っているエレボスを尻目に白い骨のモンスターに近寄ろうと進む。
当然リヴェリアやガレスが俺を引き留めようとするが下がっていてくれた方が俺としては遥かに動きやすい為距離をとって貰った。
「‥‥ふっー。さて久し振りにやるか」
ポケットにいつも入れてある真鍮色の懐中時計を手に持ち両手を突きだす。
「ハアアアアアァァァァァァァァァ!!!!」
俺の身体が骸殻に包まれるのと同時に、何処かで時計の針が進み始めたのを何気なく感じ取った。

骸殻

「ウオオオオオオオオオオオオアアアアア!!!!!」

その姿は先程迄とは違い手足に漆黒の鎧が形成されており、異様な気配のする槍を手に彼は尋常じゃない速度で彼のモンスターと戦闘に入る。

「おいおい!!なんだよあの姿!すげえな!しかもさ、なかなかイカす姿してんじゃん!」

「エレボス」

「おっと。アストレアか。」

「・・・彼・・あれを使ったのね」

「あれってあの変身の事だよな。何か聞いてるのか?」

――――あれは【骸殻】と呼ばれる、ルドガー特有の技とでもいうべきかしら。

骸殻にはワンサード（３０％）ハーフ（５０％）スリークォーター（７０％）フル（１００％）と四段階のパターンがあるみたい。

クルスニクの血を受け継ぐ者は生まれた時にはもう懐中時計を所持して、その中で骸殻を発動できる才能を持つのは極少数らしいの。ましてやフルに至っては１００年に

1人いれば良い方らしいわ。
「ほほう。因みにルドガー君はどの段階迄できるのかな？」
「・・・フル骸殻よ」
「・・！そいつは凄いな！てことは今だと・ハーフか？」
「あれはワンサード。半分以下よ」
「あれで半分以下か！充分圧倒してんじゃん！逆にフル見てみたいな！」
そう、エレボスと話をしている中でも戦闘は続いていてモンスターの外見は既にボロボロだった。
「【アッパーブライス！】」
ルドガーは強靭の爪をくぐり抜け真下から強烈な一撃を放ち剣や魔法を全て反射する表面を全て台無しにした。
それに慌てたのかその巨体からでる凄まじいスピードで距離をとろうと動いたがそれも一歩遅かった。
「【ヘクセンチアー！】」
槍で地面を強く穿ち抜き立ち上る漆黒の光柱に四肢と爪を貫かれ使い物にならなくなる。
「！」

距離をとることもままならないと悟り四Ｍはある尾をルドガーにふり亡き者にしようとするもそれもまた叶わなかった。
「【シダーエッジ！】」
穂先にある魔力を高速回転させ自慢の尾は根本から切断される。
『!!アアアアアアアアアアアア!!!』
四肢と尾と爪と。およそ攻撃出来るものは口となりやけくそになったのか凄まじい叫びと共にルドガーを噛み砕かんとするが
ひたっとその口に手を当てられ動きが止まった。
正確にはいくら動こうともビクともしなかったのだ。その証拠に今でもモンスターは先程迄のスピードは出ない手足を必死に動かしている。
「これで終わりだ！【ジ・エンド！】」
その手から凄まじい魔力の暴風と衝撃波が現れ彼のモンスターを一瞬にして粉微塵した。
私は予め話を聞いていたし、なんならホームで少しだけ骸殻も見たからまだ平静を保ったけど、隣のエレボスとかもう腹を抱えての大爆笑。そのうちお腹捩れるんじゃないかと思うぐらい。
そして肝心のロキ・ファミリアはというと

「「……」」
「まあ‥こうなるわよね‥」
全員が口をあんぐりと開き呆然としていた。
見ただけで精神がやられそうになるモンスターが一瞬にして塵なるんだもの。それはこうなっても可笑しくない現象だ。
その時地面に着地する音が二つ聞こえた。
「終わったのか」
「おっアルフィアか。それとザルドも」
「ああ。此方は一区切りついてな。」
――それで?あの化物はどうなった?
その問いにエレボスは「それが聞いてくれよ」と言う言葉と共に一部始終を語った。それはもう愉快そうに、思いだし笑いも含んでいたから腹を抱えての説明で「まともに話せ」とアルフィアから一発貰っていたけど
「そして今に至るわけだ」
「……」
話が終わり、ザルドはエレボスと一緒に笑いながら聞いていたがアルフィアは怒気かなんかこうヒシヒシと身体から出ていた。

それに気付いた私を含め三人は恐る恐る「どうした？」と訪ねフンっと不満げに彼女は言った。
「いやなに、私の時に【骸殻】とやらを使わなかったから納得いかなくてな。」
「クッ・・・ハハハハハ!!!だな！よし！じゃあ今から喧嘩売るか！今度は俺もやらせてもらうぞ！」
・・・ルドガー：逃げて超逃げて。ヤバい二人が手を組んで貴方を狙ってるわ。
そんな心の言葉はルドガーに聞こえるわけがなく笑顔で「終わったぞー！」と此方に向かってくる姿が見えるが二人を見た途端に踵を返し全力で逃げていった。
当然逃げられるわけもなくザルドとアルフィアの一撃をどうにか凌ぎきっている姿がそこにはあった。
あとはもう、金属音が響き渡り、鐘の音が鳴り、時計を刻む音が聞こえ、爆発音その他諸々と、戦いが終わった後だからか二人の顔はとても清々しいものである。
まあ：ルドガーは「勘弁してくれ！」と顔に書いてあるが：
その戦闘音に当てられたのかロキのところの三人も混ざってるのが遠目に見える。
「邪魔！」と一掃されているが
「アストレア」
「？どうしたのエレボス」

「十中八九この後送還されるよな？俺」
「そうね・・」
「すまん。それかなり後にしてくれ」
「理由は？」
「そうだな。ちょっとお店で働かなくちゃいけなくなった」
「・・・？それは・ルドガーの？」
「そう言うことだ」
「なるほど。まあ彼の元ならいいんじゃない？」
「ありがとう」

この戦いが終わり地上に戻った後、後始末がかなりめんどくさい事になったが今は省略しよう。
言えるとしたら、アルフィアとザルドは忘れ形見と会うことができ、エレボス共々従業員として働くことになった。
私の家族？そうね・一応アルフィアと戦った面々は一段階上に上がったわ。
ルドガーは・そうね・うん。一番面倒になったんじゃないかしら。
お店に着いた途端、泣き叫んだらしいし

後日談①

あのダンジョンでの戦いが終わり数日がたった。
オラリオが闇派閥から受けたダメージは随所残っているが徐々に回復しつつある。
しかし、戦闘において大事な人、建物等が失ったことは変わらない為完全に回復するのは難しいだろう。
そんな最中俺はというと・・・・
「ハアアアアアアアアアアアアア!!!!!」
「・・・・・・・・」
「・・まだやるのか」
ダンジョンに潜っていた。
これはというと俺の店が粉々に砕け散っていた為のお金稼ぎである。
詳しい話を聞くためにギルドに赴いた所、何でも付近で戦闘があり被害があったそうな。

被害総額は二億ヴァリス。
値段を見たときの第一声が「ふざけんな！」だ。
前回というかエレンピオスでの借金の１０倍の数字に目を丸くし気絶寸前になった。
だがここはオラリオ。しかもダンジョンというわかりやすい狩場が目の前にある！
ならこれは行くしかないと言わんばかりに無銭飲食を働いていたザルドとアルフィアの首根っこを掴み強引にダンジョンに入っていた。
一部始終を見ていたエレボスは「アッハハハ!!!」と爆笑するだけでなにもしないため「【ピコハン！】」と気絶させ放置してきた。
「・・しかし、俺らがサポーター擬きをすることになるとはな・・」
「全くだ。という事でザルド。いい加減ルドガーを戻してこい。」
「そうしたいのは山々なんだが・・（ほら・・あいつの店の件俺らが原因だろ？あの泣き叫び様を見たら罪悪感がな・・）」
「・・・・もう少し付き合うか」
・・・・なんか後ろで大事な話をしている気がする。
具体的には俺の借金について何か知っている様な気配が・・・・
「ブモオオオオオオオ!!!!!!」
「っ！【蒼破刃！】」

風圧を剣に纏い眼前にいるミノタウロスに向けて剣を薙いだ。
ズバン！という音と共にモンスターは顔面が無くなり魔石を残し姿を失う。
それが最後の一体だったのか付近には一時の静けさが残る。
地面に落ちた魔石を拾い上げ二人の元へ向かった。
「お待たせ。」
「・・・・・・・」
「どうした？」
「いやなに、相変わらず変な攻撃をするなと思ってな」
「そんなに変か？結構できる人多いと思ってたんだけど」
「いや、出来る出来ないの問題ではなく魔法を使わず離れた相手に風圧を当てただけで消滅とかふざけてるのかお前は」
「・・・いや至極真面目なんだが」
「更に言えば、ここに来るまでに見せた【魔神剣】？とか【ファンドル・グランデ】なる技とかどうやって地面から氷をだしてるんだ貴様。あんなノータイムで繰り出すとかあり得んだろ」
――――しかも魔力を消費した様子も無し、どうなってるんだ。
それに同意する様にザルドもうんうんと頷いている。

どうなってるって言われてもな・【魔神剣】はジュードにコツを教えて貰ったから出来た技だし、【ファンドル・グランデ】はいつの間にか出来たからな。

なんなら、アルヴィンやガイアスも出来た技だ。それを言えば元パーティーメンバーは全員ヤバいってことになるんだけど。

「・・・まああれだ！俺にも出来るんだから二人にも出来るって！拳で出来るやつもいるから余裕だよ！余裕！」

「拳で出来るものなのか。おい。地上に戻ろうとするな。今の話を詳しく」

後ろから聞こえる声を半分聞き流し地上に戻るため逆走する。

道中すれ違う冒険者か避けられ逃げられ、とヤバい者を見る目で見られた。

その後、魔石の換金が終わり二人は「用事がある」「すまんな。店が直る頃には戻る」と言いオラリオを離れていった。

店が直るまでの借宿で放置してきたエレボスにオラリオを離れていったことを伝えると「そうか・・二人の好きにさせてやってくれ」と感慨深そうな表情で既にいない二人を見送った。

なんでも、遠い村で大事な甥？に会いに行ったとか。

本当は会いに行く予定は無かったが病とか毒とか消えたからどうせだから行こう！

と二人で話し合っていたみたいだ。
「ありがとな。ルドガー」
「どうした突然」
「二人から聞いたんだ。お前から貰った薬で治ったってな。だから、こうして二人は会いに行く事が出来るんだ。」
――まあ、病が治った時はオラリオ滅ぶんじゃね？って思ったけどな！
ケラケラと笑う彼の表情は邪神の名に相応しくない笑顔で二人の安寧を心底願っている様だった。
「ところでルドガー。アストレアとの約束はいいのか？」
「約束？ってうわ！こんな時間！」
「だと思って此方から来たわ」
ガチャという音と共に「やっほールドガー」と約束をすっぽかした俺を咎める様子も無い感じで気軽に入ってきた。
「よう。アストレア相変わらず美人だな」
「あらエレボス。相変わらず胡散臭いわね」
「胡散臭いって・・・」その言葉に若干のダメージを負ったのか表情に影が射した。
「・・・え～と。アストレア？一体何の用事があるのかな？」

「あ！そうそう。前から思ってたんだけどルドガー。貴方恩恵授かってないわよね？」
「恩恵・・て確か眷属になる時に刻むなんかだっけ？」
「そうそう！折角だしこの機会にどうかなって！」
「どう・・って言われてもな・・」
「いや良いと思うぞ。」
「どうしてだ？エレボス」
「考えてもみろ。ルドガーお前はこれから借金返済の為に沢山ダンジョンに潜らないといけないだろ？んで、その為には何処かの眷属になる必要があるわけだ。幾らお前が強いからと言っても恩恵がないってバレたときは他の神のいい餌だ。」
　――第一！・こんな美人からお誘いが来てるんだぞ！断るわけないだろ！
　最後の言葉だけ本心ということがハッキリわかったよ。
「・・まあそうだな。いいよ。こんな俺で良ければ」
「やった！それじゃあ早速上を脱いで！」
　言われた通り上を脱ぐと、「「おおーー」」という二人の歓声が聞こえた。なんでも、筋肉が程よくあり余分な脂肪がついておらず見事な身体という事で言葉が漏れたらしい。
「それじゃあ・・いくわよ」
　俺の背にアストレアから出た血液が垂れ恩恵を刻む時の独特の紋様が現れる。

一部始終を好奇心から見守っていたエレボスは冷や汗を流し、アストレアは表情が驚きに満ちていく。
「おいおい・・なんだこりゃ」
「・・なんかあるか？」
「いや、なんかじゃねえよ。ルドガーお前どんな経験したらこんな事になるんだよ」
「と・・とりあえず、終わったわ。これ貴方の結果でふ」
「でふ？」
恩恵が書かれた文字を共通語に写し変えた物を渡されそれを見ると
ルドガー・ウィル・クルスニク
Ｌｖ．１０
力　・・？
耐久・・？
器用・・？
敏捷・・？
魔力・・？
？？？？？？？？？？？？？？？
《魔法》
【精霊之力】

・精霊に連なる魔法、術、即座に覚え放つことが可能。
・上限は無し

【骸殻】
・内に秘めたる変身

【友トノ共闘】
・嘗ての仲間を幻影として召喚
・現在可能な仲間
ジュード・マティス
アルフレド・ヴィント・スヴェント（アルヴィン）
レイア・ロランド
エリーゼ・ルタス
ローエン・J・イルベルト
アースト・アウトウェイ（ガイアス）
ミュゼ

《スキル》

【審判を超えし者】
・骸殻の代償が消滅

・タイムリミット付与

【八方美人・極】

・老若男女好かれる

・不幸が付きまとう

【時ト無ノ恩賞】

・嘗てのアイテム、武器、アタッチメント、なんでも取り出し可能

・移動したところはすぐさま行くことが可能

・現在登録されてる場所

・ダンジョン入口

・ダンジョン１８階層

【限界突破】

・これ以上成長することは決してない

・状態異常無効化

「「……」」

「「「……なんだこれ」」」

後日談②

ダンジョンの戦闘が終わった次の日。
体力がある程度回復したところでロキ・ファミリアの幹部たちはそれぞれの報告を行っていた。
団長であるフィンはリヴェリアとガレスの報告を聞くと表情に影が現れる。
「‥そうか。いやいいんだ。あの二人を相手に生き残って帰れるだけいい。」
因みにそのあとの二人は?と続けるとリヴェリアとガレスは首を横にふり
「すまない。アストレア様の預かりとなっただけしかわからない」
「こっちも似たようなもんじゃ」
「なるほど、もしかしたらオラリオにいる可能性も考えてギルドと連携を謀ってみるよ。
ところでその報告にあったルドガーさんが凄まじい働きをしたというのは間違いないのかい?」
「ん?フィンも知っていたのか‥ああ事実だ。あのアルフィアと事を構える位の実力の持ち主だ。」

「特に凄かったのは気絶の後じゃな。何があったのかわからんが、まさに孤軍奮闘状態じゃな。一人で二人分の働きをしていたからの。」
そして、そのあとが更に凄まじかった。とリヴェリアは語った。
エレボスが連れてきた［神獣の触手］をあっという間に蹴散らし、その勢いで異形な魔物を跡形もなく消滅させたという。
「アストレア・ファミリアが言うにはＬＶ１らしいが‥十中八九嘘だろうな」
「‥ちょっと待った。僕の時はアストレア・ファミリアで預りになってるって聞いたけど？」
「それを言うなら儂の時は店を出し始めたと聞いたんじゃが？」
「「‥‥‥‥」」
全員の言うことが少しずれている。いや正確には内容は合っているんだろう。
預りになっているとは言うけど眷属にはなっておらず、建前でＬＶ１だと言ったと考えると妥当だ。
ガレスの時は‥預りになる前の話と仮定すると納得できる。
「‥とりあえず彼の事は後々」
「了解」
実際どのタイミングかわからないが親指の疼きが一層激しくなり折れる寸前に陥っ

た。

［神獣の触手］を殺ったときか、それとも未確認のモンスターを打ち倒したときか、はたまた両方のときか。

彼については調べる必要がありそうだ。

「それと、アイズが言っていたんだが」

「なんて？」

――彼から精霊の気配がした。らしい

「っ！詳しく」

なんでも、異形のモンスターを倒した時の気配が尋常じゃないぐらい大きかったらしく、自分の知っている精霊と同等。もしくはそれ以上の力を感じたみたいだ。

「‥なるほど、因みにそのアイズは？」

「アイズならさっき出掛けたのをみたんじゃが‥ダンジョンとは違う方向に向かいおったわい」

「‥まさか」

「‥そのまさか‥か？」

◆◇◆◇◆◇◆

「ルドガー約束」

「うえ!?なんでここにって約束ってまさか！」
「おおー。ルドガー早速たらしこんだのか。」
「なわけあるか！」
「あの衝撃。【魔神剣】？おしえて」
◇◆◇◆◇◆◇
ところかわってアストレア・ファミリアのホーム［星屑の庭］
そこにはアルフィアとの激闘を終え治療に専念しつつそれに見合った成長を遂げたメンバーの姿があった。
全員が「「いやっっった!!!!」」と喜び様で見事器の成長を遂げることが出来た。
そんな中アストレア様は皆に話があるようで「ちゅうもーく」とはしゃいでいる家族に促す。
「実は皆に相談があるんだけど」
「いいですよ！」
「「はやっ!!!!」」
「おい！このボケ団長！せめて内容を聞いてから判断しやがれ！」
「ええー!?団長はこの美しい私よ！なら皆は有無を言わさず「はい！」って言えばいいのよ！」

「貴様は何処の独裁者だ！」
「アリーゼ。流石に何も聞かずに「はい」とは言えない！アストレア様話の続きを！」
「えっええ！実は・・・・」
話の内容は、エレボス、アルフィア、ザルドが生きているということと。ルドガーを眷属にしてもいいかという話だった。
ルドガーはともかく、エレボス、アルフィア、ザルドに関しては好感触ではなかった。
あれだけ好き勝手やられて「はいそうですか」と流石に了承は出来なかった。
特にリオンがエレボスの話になると眉間に皺がより乙女がしていい顔をしていなかった。
逆にルドガーの話になると皆が「「オーケー！」」と即答していた。
「・・・返事が早すぎてなんだけど。本当にいいの？男よ？」
「まあ、メンバーの中に男性嫌いがいるわけでもありませんし、腕っぷしが強く料理が上手く、それに面も良い。他のファミリアにとられる位ならうちで請け負ってもよいかと」
「それに、もしかしたらあいつの強さの秘密もわかるかも知れねえしな」
「っと！言うわけで後はよろしくお願いします！」
皆の好印象ぶりに「ルドガー・・貴方って」と考えがよぎったが頭を横に振ることで消

し去る。
「それじゃあ、彼と約束取り付けて来るわね！」
「「今からですか!?」」
　――あ・・・大事なことを言うのを忘れてた
「彼・お店壊れて借金あるから！」
「「・・・・・・・はっ？」」
「それと、その三人も同じところにいるから！」
「「・・・・・・・はっ!??」」
　後ろから「ちょっと待ってください！」と叫ぶ声が聞こえるが無視し彼のもとへ急ぐ
　自然と足取りが軽くなり次第にスキップになっていく。
「ルンルンルンルンルーン♪」
　神アストレアとその眷属が騒ぎだすまであと数日

　また何処かの村では
「ねえ、お義母さん！」
「どうした？ベル」
「そのお義母さんとザルド叔父さんを助けたルドガーさんは、お義母さんとどんな仲な

の？」
　ビシッと空気が固まり、それを聞いていたザルドはスープを作る手が止まり、じいちゃんは顔がにやける
「・・・そうだな。あいつとはやりあった仲だ」
「やりあう？」
「ああ、お互いに良いのを打ち合った仲だ。」
　あそこまで良いのを食らったのは中々無い経験だった。とお腹を擦るアルフィア。
「・ザルド」
「なんだ」
「・本当に殺りあった仲なんじゃよな？」
「間違いなく」
「あれか？外堀を埋めようと？」
「・・・かもしれんな」
　この場にいないルドガーに「強く生きろよ」と念じ料理の続きに入る。
　話がちょいちょい聞こえており捏造が若干多いが所々本当の事を加えているのが質が悪い。
「あいつの髪も白に近い色だから、もしかしたらお前のお兄さんかもな。それに目の色

も私に近くてな」
「へえー！いつ会えるかな？」
「まあそのうちな」

その頃

「【魔神剣】！」
「魔神剣！」
「うーん。いまいち威力に欠けるな」
「・でも出るようになった！」
「こっちはどうだ？【蒼破刃】！」
「やってみる！【蒼破刃】！」
「こっちは出来るんだな」
「うん。でも、魔神剣をちゃんと使えるようになりたい！」
「よし！なら練習あるのみだ！」
「おおーっ！」
「・・・どんどん、改造されていくな」

原作突入
七年後

あれから借金を返済しつつオラリオで暮らすこと7年がたった。
途中アストレアファミリアが壊滅の危機に陥ったがザルドとアルフィアが助っ人に入り数名命を失ったものがいたが無事生還できた。
そしてアストレア・ファミリアメンバーのＬＶが上がったらしい。
そして帰還するとまたもやお店が壊れている状況に陥り借金を返済することになった。
あと１０万ヴァリスで返済が出来るとなったところでまた2億の借金になったので手伝ってくれたアルフィアとザルドは「もうどんな運してるんだこいつ」と呆れた目で見られたのがかなり辛かった。
そして現在
「店長君！トマトオムレツ３つとトマトソースパスタ１つ、ピーチパイ４つ入るよ！」
「注文了解！ザルド！聞いての通りだ！」

「わかった!・こっちは任せろ!」
意外と繁盛していた。
最初はザルドやアルフィアといったオラリオの中でもトップにいる二人がいるということから、物見遊山で来る客が多かったが暫くする内に味が美味いと評判になり、ちゃんとした目的でくる客が増えたから、まあ結果オーライだ
あと、ヘファイストスのところで居候していた神ヘスティアをホールスタッフとして迎え入れなんとか店を回している。
あともう一人増えたのが・・・・
「義父・・じゃないルドガーさん!・こっちはフルーツ焼きそばとサイダー飯４つずつお願いします!・」
「わかった!・あと今なんていいかけた!?・」
アルフィアの甥であるベル・クラネルが２日３日前ぐらいに二人が連れてきて
「ここで暮らさせる」
と空いていた部屋に彼を住み込ませた。
なんでも村にいたじいちゃんが「あ・・やば、ヘラ来る」
と突然いいだし家を飛び出したらしい。
ちょくちょく二人宛に手紙が来るのだが最近来たのは「タステケ」と書かれていた。

これは大丈夫なのかと二人に問うと

「「気にしない方がいい」」

の一言でそれ以降話題にすら上がらなかった。

あとはもう一人雇っているんだが今日は休みのためこの場にはいない。

その時チリンチリンと店の扉が開く音がした。

「あ・いらっしゃいませー！・ってお義母さん！お帰り～！」

「ああただいま。ベル」

流れるようにベルをギューっと抱き締めるアルフィアがいた。

抱き締められているベルは長年の習慣からか顔が真っ赤になっているが身動き1つとらない。

それを見ていた客の男性陣とヘスティアが

「「「「チッ!!!」」」」（チッ！）

何処かで打ち合わせでもしたのかって思うぐらいキレイに舌打ちがそろっており意外と響く。

それに気づいたアルフィアがゆっくりと右手を親指と中指でスナップする形になり

「(【福音(ゴスペル)】)」

パチンと鳴らして魔法を発動する。

結果、舌打ちをした男性陣（神を含む）が目の前にある自分の料理に顔を突っ込んだ。
無いものはテーブルにガン！とぶつけている
ヘスティアは口には出していないからセーフみたいだ
それを見ていたザルドや常連客は
「「ああ・・またか」」
と達観していた。
最近彼女は指パッチンでも魔法が撃てるようになり、更には効果の強弱、範囲指定が用意になりピンポイントで撃てるようになったとか
二人は現在、ベルと同じヘスティア・ファミリアに所属している。
前まではアストレア・ファミリアに所属していたがベルがヘスティアの眷属になったことで「「それじゃあついでに」」と変えたみたいだ。
ロキやフレイアのところはと一度聞いたことがあったが二人揃って「「絶対無い」」と断言した。
「それに、アストレアのところにはお前がいるからな」
「そもそもが過剰戦力すぎだ。冒険者登録していないからまだ騒ぎになっていないから良いが」
と二人が所属しているアストレアの面々はこれ以上しごかれる回数が減ったことに

狂喜乱舞したらしい。
　まあそれが後に伝わり暫くの間更に厳しくなったらしいが・・・・
「それで？アストレアのところは終わったのか？」
「まあな。今は全員ホームで寝込んでいるだろうな」
「・・・今回は何をやった？」
「なに、いつもと同じぐらいだ。外壁の上で三時間私と鬼ごっこの後にダンジョンであいつらの行ける一番深い到達階層でひたすら戦闘だ。」
「戦果は？」
「聞いた限りだと何人かアビリティが二つ上がったらしい」
　俺とザルドは料理の片手間に幾つか質問しそのしごき様に「相変わらず大変だな」と口には出さないが思考が一致した。
「ベルのほうは？」
「あいつは・・そうだな。話しておくか」
　昼間ダンジョンに潜ってるときにミノタウロスと遭遇したこと。
　その時助けてくれたアイズに憧れを抱いたこと。（恋愛感情は無い模様）
　それを聞いたアルフィアは「そうか」と一言だけ発し、ゆっくりと店を出ていった。
「・何処行ったと思う？」

「・・・彼処だろうな」
「・・・・合掌」
遠くで鐘のなる音に自然と両手が合わさった。
ロキ・ファミリアに幸あれ

訓練

「技を覚えたい？」
「はい！お義父：じゃないルドガーさんがよく使ってる双剣術を！」
　アルフィアがロキ・ファミリアにカチコミをかけた後日自分の力不足を感じたのか店が休みの時ベルが相談してきた。
　というか：アルフィアとザルドから結構学んでるんじゃないのか？
「はい！確かに叔父さんとお義母さんに戦い方と知識と色々学んだんですけど：なんと言いますか：訓練じゃなくて凄く甘やかしてくるというか：」
「：アルフィアはなんとなく想像つくけどザルドは違うんじゃないのか？」
「叔父さんは：『肉をつけろ！身長をあと１０Ｃ伸ばしたら教えてやる！』と言ってひたすら食べさせてくるんです」
「ははは：一応成長期だし解る気がするな：」
「実際、身長が伸びる度に大剣の扱い方を教えてくれるのが嬉しいんですけど、今使ってるの短剣なので少し違和感が：」

「俺も短剣じゃないんだけど？リーチも違うし」
「いえ！ルドガーさんは双剣に組み合わせて体術も使ってるので得るものは確実にあるかと！」
――あとなにより動きがカッコいいので！
確かに得るものはあるかもしれないが、俺の動きは兄さんの見様見真似で出来たものだし、あとやってみたら出来たていうなんとなくの技なんだよな…
一応アイズには【魔神剣】を習得させることは出来たにしても結構な日数かかったし…
ただ彼のキラキラした目線を断ったらアルフィアに何をさせられるのか解らないのが怖いな。
「まあいいよ。やってみて合わなかったら止めれば良いだけだし。」
「やった！それじゃあ何時からやりますか？」
「何時からって…今からやる？」
「では！早速外壁の上に行きましょう！」
――準備してきます!!
バビューン！と音がしそうな勢いで部屋に戻っていった。
今のベルを見ていると十代の自分を思い出すな。

あの頃は兄さんに教えてとなんでもせがんでいたっけな・・まあ『お前にはまだ早い』って言われて断れ続けられたけど。
「っと・・俺も一応準備するか」
そういえば・・ザルドとアルフィアとエレボスとヘスティア様今なにやってるんだ？

◇◆◇◆◇◆◇

「「ウオオオオオォォォォォォォォオッッッッッッ!!!!!!」」
【福音（ゴスペル）】」
「フンッ！」
「グハッッッ!!」
現在【フレイヤ・ファミリア】本拠地である『戦いの野（フォールクヴァング）』ではギルドに登録されている最高ＬＶの三人が争っていた。
その最中、アルフィアが放つ魔法によりザルドとオッタルが吹き飛ばされると思いきや飛ばされたのはオッタルのみでザルドは根性で耐える。
「甘いなアルフィア！いつも同じ魔法でやられる俺と思うな！」
「そうか。じゃあ直接頭にぶちこんでやる」
「それは勘弁【福音（ゴスペル）】グオォォオ!?」
範囲を全体ではなく一点に集中させた音魔法の暴力は先程耐えたザルドを呆気なく

ダウンさせる。
「あと猪男。もう少し早く動け。丸見えだ」
「ッ!?ウオオァァァ!!!」
「【五月蝿い(ゴスベル)】」
　その三人が争っている一部始終を観戦している三人の神様は、猪男(オッタル)の主神は少し面白くなさそうにし、嘗てオラリオを壊滅一歩手前にした男神はえらく楽しそうにし、そして二人の主神となった女神は唖然としていた。
「いや～良いもんを見せてもらった。感謝するぜフレイヤ」
「‥それはどっちの意味かしら?」
「それはもちろん。自慢のオッタルが倒れながらも立ち向かう姿だよ」
「‥ちょっと気にかかるけどまあいいわ。それよりもヘスティア解ったかしら、これが貴女が眷属にした二人の力よ」
「う‥うん。話には聞いていたけどまさかここまでとは思ってなくてかなりビックリしてる」
「と言うわけであの二人私にくれないかしら?」
「イヤイヤイヤ!!突然何を言い出すんだい!?やるもんか!というかキミのところにはオッタル君がいるじゃないか!」

「それはそうだけど・・二人とかそっちの方がズルいわよ。何をどうしたら眷属に出来たのよ？」
「それは・・たまたま着いてきたというか・・運命の巡り合わせというか・・血の関係というか・・弟の不始末・・的な？」
「どういう意味よ」
「とにかく！あの二人は僕の眷属だ！幾らコレクション気質の高い君でも絶対にやるもんか！大体エレボス！君は笑いすぎた！」
「イヤイヤ!!血の関係とか不始末とか当たってて笑うしかないだろ!?」
うが～～っ!!!と頭を振り回すヘスティアを横目にフレイヤは何かを思い出したのか溜め息をついている。
それを見た二人は何事かと思い顔を見合わせた。
「珍しいなフレイヤがため息なんて」
「ええ。実はちょっと探している子がいるのよ。」
「探している子？」
「・・・まあいいかしら。魂の色がね純白の色だったの。それも白すぎて眩しい色を放っている位の」
「女神の中でもトップに君臨する君に目をつけられるとはその子供もラッキーだな。因

みにどんな子供なんだ？」
「兎見たいな子」
「兎・？」
「（まさか・？）」
　魂の色等と把握する手段は無いが兎みたいな子供は二人がよく知る人物であれば面倒な事になると思いアイコンタクトで話を強引に変えようと試みる。
「全く！その兎もまた運が良いのか悪いのかわからないな！」
「そうだね！因みに他に気になった子供とかいるのかい!?」
「他に？そうね・・あ」
「？・」
「エレボスとヘスティアのいるところの店主の色が結構気になってるわ」
「（ルドガー・・・・）」
　こんな時でも君かよ・・・と二人同時に頭を抱えた。
「因みにどんな色なんだい？」
「そうね。黄色と黒、あと少し銀を加えた独特の色をしていたわ」
「・・・また凄い色をしてるなあいつ。」
「おそらく黄色と黒は彼本来の色。それと銀は身内かしらね鈍く光りつつも守るように

輝いていたから」
また見たいのに・・・と三人の繰り広げる戦闘を見ながら溜め息をまたついていた。
「またってどういうことだ?」
「・・・もう見れないのよ。一目見たらもう見えなくなったのよ。なんでか解らないけど」
――そろそろ終わりかしらね
会話していると三人の戦闘が既に終わっており最後まで立っていたのはアルフィアでギリギリ膝をついていたのはザルド。
「・・・全くオッタルってばもうちょっとダンジョンに行かせるべきかしら」
肝心のオッタルはうつ伏せで倒れておりピクリとも動かない。一応胸は動いているから呼吸はしている様だ。
「ヘスティア」
「なっなんだい!?」
「気を付けなさい。これから二人を付け狙う輩は増えるはずよ。ましてや団員数もそんなに多くないファミリアは周りからして餌でしか無いもの。」
――先人からというか二人と戦わせてくれたお礼として言っておくわ。
「それは・・大丈夫だろ」

「どういう意味かしらエレボス」
「今は全く弱いが期待してるニューヒーローが此方にはいるんでね。それに・・あいつがいるからなんとかなるだろ」
「あいつって・・？」
「それは後のお楽しみで！」
――それじゃあいくぞヘスティア。ルドガーのデザートが待ってる！うえ!?え・・あっちょそれじゃあね！フレイヤ！
「・・気になるけどそれより今は」
『戦いの野（フォールクヴァング）』で今も尚倒れているオッタルにどのような施しをやるべきか考えよう。

壁上の訓練

外の気候は雲1つ無い晴れ模様。こんな時にダンジョンに潜るなんて勿体無いと思うほどの天気だ。

そして僕の父親のような存在。叔母…じゃなくてお義母さんが気になっている人との訓練。これで心が浮き立たない訳がない。

ない…が

「ベル！お前の長所は早さだ！それを活かすには体力が必死！だから走れ！強くなりたければな！」

「は…ハイイイィィィィィ!!!!!!」

その人が後ろから全力で襲ってこなければの話だけど!?

ヤバイヤバイヤバイ!!?初めてルドガーさんと鍛練するけどお義母さんと似たり寄ったりの人だこの人!?

少しでもスピードが緩まれば手に持ってる銃?で足元とか顔面すれすれにヒュンって何か通りすぎるんだけど!?コワイ！この人!?数分前の僕を殴りたい！

「ほら！遅くなってる！【ソート・ラルデ】！」
飛び上がってさっきまでいたところにハンマーが振り下ろされ…って!?
「うおわぁ！罅！罅！入ってます！」
「だからどうした！【トライスパロー】！」
いつの間にか武器が変わっていて緑の塊が僕を追尾してきた！
「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁ!?!?」
ああ…お祖父ちゃん。女の子とイチャイチャする前に僕の命が消えそうだよ…。いやお義母さんがいる時点で無理な気がしなくもないけど。
◇◆◇◆◇◆◇◆
「…生きてる？」
「い〝き〝て〝ま〝す〝」
口の中の水分が空っぽだ。それに身体中の塩分が消えたみたいに汗がしょっぱくない。
「ほら起き上がんな。これから型の練習するぞ」
「ッげほ！ッッ今からですか!?」
「疲れたときこそやるべきってな。そしたら余計な力とか加わる余裕ないし最適な動きが身に付くしな。ほれ水」

「なるほど…」
　そういえばお義母さんもそんな事を言ってた気がする。ただそれを早い段階でやると成長の妨げになるとかでやったことは無かったけど。
「ちなみにアルフィアの奴アストレア・ファミリアを鍛える時これをやってからダンジョンに行ってるらしい」
「鬼ですね」
「普通に死ぬよな」
　これをお義母さんが相手と想像すると…
『さっさと動け！【福音（ゴスペル）】』
『あ、あ、ぁぁぁぁぁぁ!!!!』
『其処には残響が生じているぞ【炸響（ルギオ）】』
『いやぁぁぁぁ!!!!』
　あ…別に大差ないや。
　向こうは魔法で此方は物理だ。見える分まだましかもしれない。
「さて、型といっても今からするのは見とり稽古だ」
「見とり稽古…ですか？」
「ああ。流石に初回だしな。それに動けないでしょ。」

「っ！いえ！そんなこと…ってあれ？」
　立ち上がろうとすると膝が笑い始め自然と尻餅をつく。それを見たルドガーさんは
「やっぱり」と言わんばかりに苦笑いしていた。
「俺も最初はそんな感じだったからな。気持ちはわかるよ。でも急くのは駄目。心にゆ
とりを持って…な？」
「わ…わかりました。」
「わかればよし」とルドガーさんは言った。同じ体験でもしたのか。凄く訳知り顔だ。
「それじゃあ、今から俺がよく使う技を行っていく。ベルはそこから自分の動きに使え
そうなのを覚えていくんだ。」
「？全部じゃなくて良いんですか？」
「まあな。それに俺は全部使うからな。全部が全部ベルに適した動きとは限らないし
な。」
「わ…わかりました」
「よし…それじゃあ」とルドガーさんは双剣を構える。今更だけどあの剣と銃とハン
マーって何処から出してるんだろ。いつの間にか武器が持ち変わっているから次の動
きが読みづらい。
　そして、あの多彩さ。あの人のことを器用貧乏と言うのだろう。お義母さん曰く借金

も抱えているから正にその通りらしい。

「……ッ！」

その時ルドガーさんが動き始めた。さっき自分の使える奴だけと言っていたがどうせなら全部覚えたい！だって男の子だもん！

ルドガーさんの剣に風圧が纏わりつく！…まとわりつく？そのまま短距離を薙いだ！

「……え」

「次！」

「……え!?」

続いて地面に剣を突き刺し前方に何かを放った。あれは…衝撃？現に奥の方で何かが弾ける音がする。

「次！」

前方に潜り込むような動きから敵を断ち蹴りあげる動きに合わせ、また先程と同じような何かが放たれる。

「次！」

次の動きは純粋に見えなかった。いつの間にか動きそして終わっている。ただ地面には二本の直線が刻まれていた。

「次！」
炎を纏った蹴りで飛び上がり熱を纏った状態の剣閃で切り刻む動きをする。何処から熱を纏ったのかさっぱりわからない。
「次！」
その後ルドガーさんは型を続ける。
一刀で斬りつけた後の蹴りや、舞うように素早く斬りつける動き。
斬りあげと斬り下ろしの二段斬り、二刀を正面に突き出し突進する技。
一刀で頭上より突き刺す技。素早く間合いを詰め、斬りつけながら後退する技。
縦に二刀を重ね、前方に一回転し敵を割り砕くような技。
二刀の連続突き。といった具合に。
単純な技が幾つかあるが、それらは全て繋がっているとすると十分な驚異になりうる。
そしてそれを瞬時に行う洞察力や判断力。それの全ての元となる体力。
ただ言えるのが
「(ああ。この人も人外の類いかもしれない)」
お義母さんやザルドさんの同類を見た気がする。類友という奴か。
「…ベル？」

その時の僕は遠い目をしていたらしい。

◆◇◆◇◆◇◆

「…落ち着いたか？」
「はい。僕は大丈夫ですよ。」
「うん。目が死んでるな。」
一連の動きが終わった後ベルの目が死んでいた。
「使えそうなのはあったか？」
「ああはい。それはもちろん。ただ…」
「ただ？」
「何であんな動きが出来るんですか？」
「出来なきゃ死んでいたからな…。（ギガントモンスターを狩るために）」
「そんな場所なんですか!?（ダンジョン）」
何か致命的にすれ違った気がするが間違いではないな。
「そうだとも。なんならただ斬りつけただけなら無限に回復するピンクのモンスターとかいたぞ？」
「何ですか!?そんなキモいのがいるんですか!?てかどうやって倒したんですか!?」

「でっかい一撃をぶちこんでな。いやぁ…キモかった。しかも分裂する。」
「ええー…。」
「他にもいるぞ。例えば…」
　空飛ぶでっかい昆虫やら横幅が２０～３０ｍ位ある蠍とかの話をすると驚愕を通り越して顔面が蒼白している。
　いや、よくよく考えればダンジョンにも似たような大きさの奴もいるから前知識としては妥当かもしれない。
「まあ…なんにせよ。いつかはそんな奴と戦うときが来るんだ。だけど今はその時じゃない。ゆっくりと慌てずに備えておけば大丈夫だよ。」
「っ！はい！」
　よし、良い返事だ。ワシワシとベルの真っ白な髪を撫でる。照れ臭そうに目を細める彼は何処となく嘗ての相棒を彷彿させる。
　――エル：今どうしてるかな。子供扱い禁止とかよく言ってたな。
「あの…？ルドガーさん？」
「おっとすまん。んで？この後どうする？」
「そう…ですね。ダンジョンに行ってもうちょっと体を動かしてきます。」
「おっ。やる気は上々か。それじゃあ油断は禁物でな」

「はい！」
行って来まーす！と先程までの疲れが嘘みたいにダンジョンに駆け出していった。
うん。冒険者って基本あんな感じなのかな。こう…体力無限的な。
「さてと。この後は…っと。」
とりあえず、ヘスティアの教会の清掃。デメテル・ファミリアで野菜の調達。あとは…
「そういえば借金の催促が全くないから平和だ。」
以前は何をしようかと考えるとタイミングが良いのか悪いのか、ノヴァから催促の電話が舞い込んで来る。
お陰で退屈しなかったのは良いのだけど…
「…俺もダンジョン行くか。」
とりあえずやること済ませたらダンジョンに行こう。一応ウラノスには冒険者登録しなくてもダンジョンに入れる許可は得ている。
そして眷属になったことにより直ぐ様18階層に跳ぶことが可能になった。
以下のことにより他の冒険者に顔を合わせずとも、攻略もとい資金調達が可能になったわけだ。
「ルドガー!!!!」

「ん？」
その時、何処からともなく俺を呼ぶ声が聞こえてくる。その方に視線を向けると、うちの団長が土煙を上げるかの如く全力で走ってきた。
そしてその勢いのまま
「ドーーーン!!!!」
「うおっとと。」
首もとにしがみついてきたから、威力を殺すため後ろにステップを踏む。
その行為に気づいたのか「えへへ」と顔をにやけさせながら頬擦りをしてきた。
いや正直、いつ頃からなのか。いつの間にか彼女…正確には彼女達か…に気に入られ、人気のないとこ、ホームとかだとこんなスキンシップが当たり前に増えてきた。
アルフィアに見られたときは死を覚悟したけどな。
「どうした？アリーゼ。そんな勢いで来たら危ないじゃないか。」
「そんな事より！ルドガー!!!!!」
「はいっ!?」
ガバッ！と云わんばかりに顔を上げるアリーゼ。その顔には何か重要な事があると書いてあった。
「お腹空いたわ！」

「はいっ？」

その台詞の後に続く腹の音「グギュルルルル」という音が全てを台無しにした。

「もう何か食べようと思ったらホームに食材が空っぽ！折角だからルドガーのところで食べようと思ったら誰も居ないんだもの！そしたらアーディがルドガーなら壁上にいるって言ってたからこうして来たのよ！」

「お・おう。自分で作るという選択肢は？」

「私作ると全部焦げるのよ。」

そうだった。アリーゼとリューには厨房に立たせてはならないというルールがあった。

「他の面々は？」

「お店で待機中よ。早く行かなきゃ皆から折檻を食らうわ！」

「私がね！」と胸を張って言うアリーゼ。うん、胸張って言うことじゃないな。

「わかった。それじゃあリクエストはあるか？」

「お腹一杯食べれれば何でもいいわ！」

「一番困るリクエストをありがとう。」

仕方ない。着くまでに何を作るか考えておかなきゃな。顎に右手を添え「うーん」と悩んでいると腕を絡ませてくるアリーゼ。

「これこそ役得と言う奴よね。ナイス私！」
　今のは聞かなかった事にした方が良いのか・・。まあ此方も役得だから何も言わないが。
「うふふ！」とスッゴい笑顔のアリーゼ。そして何故か冷や汗が出てくる俺。良いことの後は悪いことが起きる。これ鉄則。

「「「あっ」」」

「」あっ「」

やば

「……」
「……えーっと。」
空気が重い。目の前にいる灰髪の美人さん。アルフィアから発せられる威圧感が周囲を圧迫する。
「……」
彼女からの目線が俺の腕。所謂、アリーゼとの腕を絡ませてるところに移った。
「…えーっと、あ！そうだ！僕はヘファイストスの所に用事があるんだったー。ではサラバダー。」
「おーっと俺もヘルメスの所に用事があるのを思い出した。ではなー。」
神様二人はさっさと退散した。しかも超棒読みで。もう一人の屈強な男はいつの間にか姿を消している。
「……あわわわわ、ど…どっどうひましょ。」
肝心のアリーゼは顔を青ざめ、更に身体を震わせており、その振動が俺に伝わってく

る。
「……。」
　すると目の前の彼女は唐突に身体の向きを変えた。そしてゆっくりと、散歩をするように歩き始めた。
「…ふぇ?」
「ん?」
　よくわからないが、距離が出来たことにより空気が軽くなる。…機嫌治ったのか?
「…ねえ。ルドガー。」
「どうした?」
「あのさ…アルフィアが向かった方向って貴方の店の方よね?」
「だな。」
　まあ頻繁に家に来るし珍しい事じゃない。ただ…
「珍しいよな。基本的には教会でゆっくりしてからいつも来てるし、店が休みの時は夕方辺りから来るのに。」
「それがどうかしたのか。」こういう時も有るのだろうと、アリーゼに言うと何故か額から汗を流してる。
「あの…さ。申し訳ないんだけど、急いだ方がいいかも…」

「え？」
ガバッと顔を勢い良く上げ「いいから！」と強く引っ張る。態勢を崩しながらも足を動かす。何か気付いたのだろうか。
◇◆◇◆◇◆◇
「……腹…減ったな。」
「…ええ。チッ…遅すぎるだろうが…あの糞団長め。」
「……輝夜。流石にそれは。」
所変わって此処は例のルドガーが経営する料理店。オラリオの中でも他の店と比べて一風変わった料理を出し、且つ提供する人物が大物過ぎることである意味有名なお店。
そこにはアストレアファミリアの中心人物の小人族のライラ。人間族の輝夜。妖精族のリューが居た。
「…くっそ。こんな時に昨日の訓練での経費がバカ高く付くなんて…ついてねえな。」
「…いや。あの女とやる時は何時もこんな感じだろ。」
「…否定は出来ませんね。」
「でもまあ、こういう時ルドガーの奴が意外と頼りになる。」

「ああ。同じファミリアってことで無料で提供ってのがいい。」
「しかも旨いってのが尚良い！」
　三人とも腹減りでダウンしてるように見えるがこれから食べる料理が楽しみなのか、徐々に元気が見え始める。
「奇跡的にホームにあった物で私達以外は食事にありつけれて、食べた代わりに夕飯の調達。綺麗に別れることが出来たのである意味良かったのかも知れませんね。」
「だな。…にしても遅くね？」
「ああ。壁上から此処まで、往復でアリーゼの敏捷値からするとこんなに掛かるとは思わないがな。」
　時間が気になり始めた三人。向かいに行くか？と話し始めた、その時…
「【……の……い……罪】」
「……？」
「なんした？輝夜？」
「いや…今何か聞こえた気が…」
「気のせいか？」と輝夜が辺りを見回す。リューとライラは聞こえなかったのか、輝夜の方を不思議そうに見る。
「【……く。……救い。……音色……】」

「うわっ！」
「ライラ？どうしました？」
「いやっ！何か急に寒気がした。」
「何でだ？」と鳥肌も出てきたのか、腕を仕切りに撫でる彼女の姿。
「【神々……、……の竪……、……旋律、す……】」
「……」
「おい…リュー！お前すげえ汗出てきてんぞ！」
「だ…だい…大丈夫です…」
「大丈夫じゃねえだろ！ほれ！タオル！」とライラがリューにタオルを投げ渡す中、輝夜は先程から微かに聞こえてくる音に集中していた。
「【箱庭に……運命よ砕け……。私は……いる！】」
「…これは！まさか！」
「どうした！輝夜！」
「全員！今すぐ此処から離れろ！」
　その声に裏口に真っ直ぐ向かう三人。先程からの嫌な感覚に自然と身体が従った！
「【代償……に。……証……万物を滅す！】」
「【哭「始まりと以下省略！【ストップ・フロウ！】」

◆◇◆◇◆◇◆

「…あっぶな。」

時を止めた。といっても持って数秒が限界だが。アルフィアの無効化するエンチャントがどう働くか微妙だったが、上手く行ったみたいだ。

「さて…と、どうするか」

時間がない。詠唱を止めるのはぶっちゃけ無理。であれば被害を最小限に食い止める方法を探すしかない。

「…精霊術で打ち消しのは…無理だな。骸殻も…難しいな。」

となると……あ‥

「あったな。」

嘗ての世界でクランスピア社のビックリナイスな便利グッズ開発室で爆発から偶然産まれた、与えるダメージが全部一般男児のデコピン一発分のダメージになる特殊な指輪である。

「これをっ‥え…ちょっと。」

人差し指、中指と嵌めようとするがキッチリ嵌まらない。小指は隙間が出来てしまう。

「となると薬指は…何で綺麗に嵌まるんだよ。」
此所にあるのが当たり前と云わんばかりに綺麗に嵌まった。しかも
「…何でこういうときに限って右手が強く握られてるんだか。」
しかも血が出るんじゃないかと心配するぐらいに強く。
その時時間停止の効果が失くなり世界がまた動き出す。
「【け、聖鐘楼！】」
「【ジェノス・アンジェラス！】」
その時、頭上に灰銀の巨大な『鐘』が顕現し、咆哮に似た轟音が俺の店に降り注いだ。

「エレボス」
「ん？どうしたヘスティア。」
「ルドガー君ってあれかい？」
「ああ。人並みに勘とか恋愛とかを察知する力はあるが天然入りのタラシだな。しかも女難付き。」
「……下半神にならないことを祈ってるよ。」
「あ…そこまでじゃないが、何人か落としてるぞ。」
「え〝っ」
「だけどアストレアのライラは別な。ちゃんと勇者に一途だぞ。」
「もしかして…他の面々は…」
「……。」

食事

「はい、お待たせ。今日のメニューは親子丼の大盛だよ。お代わりもあるからな。」
「待ってました！」
「ようやく飯にありつけるぜ。」
「ええ、もう一時はどうなるかと思いましたけど、この団長と恋愛雑魚店主のせいで。」
「輝夜、そう言うのは止めるべきだ。すいませんルドガー。」
「いや事実そうだし、否定はしないよ。」
　ハハハと苦笑いをする。恋愛は…うん。振られた記憶しかない。しかも女性運は余り高くないしな。混浴行ったら消化されそうになるとか…あまり考えないでおこう。
「ところで…アルフィア。そろそろ機嫌直せよ。」
「（プイッ）」
　あ…そっぽ向いた。
　参ったな。こういう時の対処法がさっぱりだ。
　他の女性陣に助けを求めると

「(自分でどうにかしろ)」
「(巻き込むな)」
「(すいません。こう言うのは疎くて)」
「(ガンバ!)」
うん。頼りにならないな。
「あー…アルフィア…その…っと。」
機嫌を取ろうとすると丁度伝書鳩がやって来た。
しかもこれはウラノスからの依頼書だ。
内容は…
「……はぁ。」
「どうしました?ため息ついて」
「ん?強制任務。」
「「うげっ」」
アルフィア以外の面々が女性らしからぬ声を上げる。
気持ちはわかるぞ。俺は今こんな状況だから尚更な。だけど…
「大丈夫だよ。俺個人の強制任務だ。皆は関係ないよ。」
「なら安心か。…安心なのか?」

「…度合いによるな。」
「ルドガーが出動ってよっぽどよね。」
彼女達がそれぞれ頭に?を浮かばせながら言う。
それを尻目に詳しい内容は手紙には書かれておらずただウラノスの元で詳しい話をするとだけ書かれてあった。
「でもそっか～強制任務なら仕方ないけど、怪物祭はルドガー参加出来ないのね。」
「怪物祭って…あーそっか、あと数日後か。普段なら出店してたもんな。」
「お祭り事の時ってピンク色の綿飴とか作ってたわよね。」
「そうそう、ところで何でピンクの綿飴なの?」
「何でって…気分?」
実際、本当に気分なのだ。セオリー通りに作るのも良いがこう一捻り欲しいって思ったら取り敢えずピンクにしてる気がする。
「…これがピンキストを極めた結果なのか…」
「ピンキスト?」
「いや! 何でもない!」
脳裏にピンキストの少女と喋る人形が浮かぶ。
うん。ピンクにするのも程ほどにしよう。

「それにしてもルドガー。毎度毎度祭りの時の売上は上々のようで。なんなら普段よりも稼いでいるのでは？」
　クスクスと袖で口元を隠しながら輝夜が口ではそう言うが目から「阿漕な商売をやりやがって」と訴えかけてくる。
「そうそう！ところで何時も気になってたんだけど儲かってたの？」
「それが「どっこいだ」アルフィア。」
「たまに私とザルドも暇潰しに手伝うが最終的にギルドが半分ぐらい持っていってる。幾ら材料費が砂糖だけとは言えな。」
「いや。二人がいるときだけ売上結構悪いからな。こう遠目で見るだけで寄り付かなくなる。」
「…チッ」
「あらあら。案山子…いんや？人型の強臭袋といったところか？一級冒険者でも客寄せは苦【福音】あ痛！」
　輝夜の身体が軽くのけぞった。それを見た一同は「え、っ？」と驚愕しており、対してアルフィアは「？」と頭を捻っている。
「〜〜〜ッッッおいっ！幾ら本当の事とはいえ魔法を放つアホがいるか!?」
「……。おい、何をした」

「あ〝っ？」
「だから何をしたと聞いた。今のは軽く天井が吹き飛ばせるぐらいだした。そんな小さい怪我ではすまない筈だ。」
　その場に居た全員がゾッとした。彼女の魔法の強さを身をもって知っている為、確実に一筋縄では行かないからだ。
「…よかった！着けておいて本当によかった！借金がまた増えるかと思った。」
「うん。ちょっと待った。ルドガーお前何した？」
　ジッと目線が集まる。あ…やべっ。
「何ってアルフィアに指輪を着けたんだ。」
「指輪…というとこれか。」
　該当する指輪を示すとキラリとタイミング良く光を反射する。しかも左手の薬指に着けてるものだからアストレアの面々が「あらあら。」と云う反応をした。
「それ、前の世界で偶然手に入れた、全ての攻撃がデコピン一発程度になる不思議な指輪なんだ。」
「「「マジで？」」」
「ああ。アルフィアがジェノスしても全然大丈夫だよ。」
「そういえば確かに先程放ってましたね。」

「ちょいまち。それいつ着けた。」
「さっき着けたね」
「さっきって何時よ。」
「ジェノス放つとき。」
「…何時？」
「だから【アンジェラス！】っていうちょっと前。時間を止めてちょいっと。」
「…今なんつった？時間を…止めた？」
「うん。」
「はい！皆！今のは聞かなかったことにした方が良い案件ね。ルドガーは後でアストレア様のところで話があるわ。」
「お…おう。」
　…相手の攻撃を避けただけで時間を止める指揮者がいるんだけど、言わない方がいいか。
「ところでアルフィアその指輪「貰う」あ…そうですか。」
　先程までの不機嫌が吹き飛び、背景に大量の花が見える。
「それじゃあちょっと着替えてくる。食器は洗ってくれると助かるんだけど。」
「それは此方でやっておきますよ。ゆっくり着替えてきてください。」

「ありがとうリュー。」
取り敢えず…あの格好でいっか。
◆◇◆◇◆◇◆
「ところで、アルフィアの仲間に時間を止める奴っていたの？」
「いるわけないだろ。良くて時間が止まったんじゃないかって位早く動くやつらだけだ。ゼウスとヘラの団長がそれだ。」
「マジでか。じゃあ止めたルドガーって…」
「化物だな。」
「化物ね。」
「化物か。」
「あとそれよ。その指輪をアルフィアが身に付けるだけで超長文詠唱がデコピン一発っておかしすぎるわよ。どういう構造なのかしら。」
「……。ある意味良いかもしれないな。」
「それってどういう？」
「私のｌｅｖｅｌとなると基本的に深層に行かなければ歯応えが全くないんだが、これを身に付けていればゴブリン相手でも練習になるかもしれないと言うことだ。」
「それって…所謂サンドバッグじゃ。」

「そういうことだ。」
「もしかしてルドガーとかって。」
「だな。今のアルフィアと同じ事を考えていたのかもな。」
「おっそろしいわね。」
◇◆◇◆◇◆◇◆

「お待たせ～って何で皆してそんな得たいの知れない者を見る目で此方を見る。」
「「「別になにも」」」
「まあ、いいんだけど。」
「……その格好でいくのか。」
「そうだけど…ダメか？」
「いや。構わないが…。」
今の俺の格好は髪を全て黒に染め、目元から鼻辺りまで隠れた仮面を着け、嘗てのエージェントの服を着ている。
「でた。ルドガーの第二形態。あれ初対面だと意外とわからないのよね。構えを除けば。」
「確かに…構えを除けばですけど。」

「他の武器を使えばもっとわからないと思うんだけどな。」
「他の武器か…これとか？」
　手元に取り出したるは、白と茶色の食べ物…のような物だ。見た目はあの食材に酷似しているが歴とした武器である。
「うわっでた。あれでモンスターを倒すのを見ると可哀想なんだよな。モンスターが。」
「ええ。生まれて初めてモンスターに同情したものです。」
「それじゃあ…これとか？」
　取り出したるは黄色い柄で先端が赤色の槌である。誰かが見れば何処と無く見覚えのあるシルエットだがこれでも歴とした武器である。
「「「それも変わんない！」」」
「わかったよ。それじゃあ今回はこれでいくから。」
　余りに不評…みたいだから嘗ての仲間の武器である、【棍】を持つ。
「棍か…そういや冒険者で持つ奴ってあんまいねえよな。使えるのか？」
「なんとなく？」
「大丈夫なのか…それは。」
「まあ大丈夫だと思う。あとは…あ～あーあ゛～う゛ぅん！」
　いつもの声より一つ二つ音程を下げる。すると…見た目も相まって俺が私だと特定

するのは難しくなる。
「あ～私…この声も良いのよね。渋い声っていうか一児のパパの声っていうか。」
「なんとなく言いたいことはわかりますな。雰囲気がガラッと変わるというか。」
「人によりけりって言ったところか。」
「…取り敢えず私は出る。戸締まりは「待て」…なんだアルフィア。」
「……ネクタイが曲がってる。」
「…堅苦しいのは苦手なんだが。」
「身だしなみは大事だ。ほら。これで大丈夫だ。」
「礼は言っておく。」
首もとのネクタイをキュッと締めたあと、頑張れと云わんばかりにポンと肩を叩いてきた。
…くそ。年上の女性にはいつまでたっても勝てるイメージが持てない。
「なんだ…その目は。」
「「「べっっっつにー」」」
ニヤニヤするな。生暖かい目で此方を見るんじゃない。
「…それじゃあ行ってくる。」
「「「いってらっしゃい！」」」

スキルが更新されました。
時ト無ノ恩賞
ｎｅｗ・祈祷の間
ｎｅｗ・５０階層

強制任務～序～

ダンジョンの下層には閃燕（イグアス）と呼ばれるモンスターが存在する。そいつは下層の中でも最速で身体は小さい。そして何かに当たれば死ぬ位の耐久性ではあるが特攻を仕掛けてくるのが特徴だ。だが上手くいけば真正面からの対処が可能という事で

「ハアッ！【散沙雨（ちりさざめ）】！っ！【大輪月花（たいりんげつか）】！」

相対する閃燕を連続突きで魔石に変えていく。視界の隅で幾つか動く気配を感じ棍の持つ位置を変え周囲を凪ぎ払う。

「…そこか！【瞬迅爪】！」

凪ぎ払う事で一瞬閃燕達の動きが止まる。その隙をつき残っている奴らの元へ神速の突きを放つ。

「終わりだ！【三散花（さざんか）】！」

残りの閃燕を、振り下ろし、振り抜き、打ち上げの流れる動作で命を絶つ。

「よし。こんな具合か」

「……えー。ルドじゃない、ヴィクトルさん本当に使ったことが少ない武器なの？」
「既に一流は越えてるぞ。その使いようは」
「何を言う、仲間が使っていたのを模倣しているだけだ。実際まだ違和感がある」
「いやいやいや」
　アーディとハシャーナが揃って顔を横に振り否定する。何が駄目なのだろうか。
「ヴィクトルさん。あのよ閃燕相手に棍でしかも使いなれない武器でまず戦わないからな」
「そうそう。私達だと盾役の人が防いで後ろから攻撃するようにしてるの」
「それを突きで全滅とか無理だから」
「……そうなのか。しかし一級冒険者とかなら魔法で一掃するんじゃないのか？」
「それは一部の人だけ」
「…そうか」
　この動きに精霊術を加えたのがレイアのスタイルなんだが…本当に凄かったんだな。
「…でも負けてないよな。あっちは二刀流だけど俺三刀流だし。いや！四刀流だしな」
「どうしたの？」
「う〝ぅん！何でもない。気にするな」
「そう？ならいいんだけど」

アーディが覗き混むようにして下から見上げてくる。先にいるハシャーナは「なにやってんだが」と言いたげな顔でこちらを見ていた。

しかし、本当に違和感が凄い。棍は棍でも俺に適していないような感じが有りすぎる。

「そういえばテレビでピエロが棍を使っていたな…確か」

そのピエロは棍をブーメランのように投げて的に当てた後自分のもとに戻るように手を加えていた。その後空中で身体を地面と平行するように回転させながら棍を操っていた。

「えっと、こんな感じに！」

ブン！と空気を切り裂く音と共に棍が回転しながら１０Ｍは離れただろうか，周囲を踊るようにして自分の元へ戻ってきた。

「出来たな…んじゃ今度は」

「「ちょっと待った！」」

続けて動こうとすると二人から止められた

「お願いだからさ！余計なことしないで！」

「そうだ！俺は早く終わらせて帰りたいんだ！てかさっきな！目の前に棍が鼻を擦ってヒヤッとしたんだよ！抉れるかと思ったじゃねえか！」

「お…おう。すまない」
　二人にはちょっと悪いとは思ったが、自分のスタイルの確認が出来た為結果オーライである。
　たたまあ鼻先擦ったのは俺もビックリだ。
「ところでハシャーナさん。あとどれくらいで目的地何だ？」
「ん？ああ、後三階降りた位で合流なはずなんだが」
「だね。気楽に行こうよ！何か心配事？」
「心配事…というより他の皆は何をしているのかなーって思ってね」

◆◇◆◇◆◇◆

「【福音（ゴスペル）】」
「ギャウ!?」
「チッ【炸響（ルギオ）】」
「オウッ!?」
「…珍しい光景だな。あそこまでゴブリン相手に手間取るアルフィア何て始めてみた

ぞ」
「ダンジョン入ってからまだ1階層なのに1匹しか倒せていないのは最早異常よ」
「高出力の魔法に加えその追撃、普通ならば終わってるのに、あのゴブリン達ピンピンしてますね」
「大きく吹っ飛ばされたにも関わらず平然と戻って来てますし逆に強化種？と錯覚してしまいそうなタフさというか何というか」
「ほら見ろよ、めんどくさくなってさっき壁にめり込ませたゴブリン復帰してるぜ」
「いやそれよりもアルフィアの顔よ。スッゴい苛立ってるわ、絶対近づきたくない」
「「それな」」
アルフィアはゴブリン達をしばき倒しているが全然魔石にならない。
ある時は顔が弾け飛ぶであろう威力のアッパーカット
ある時は全身が砕け散る威力の連打
ある時は首がスポーンと逝く足刀
ある時は
ある時は
実際アルフィアの動きは全力だ。長い間一緒にいた俺が保証する。それでも成果はゴブリン1匹だ。

「ねえザルドさん。あれ本気の本気よね？」
「ん？ああ全力だな。全力で動いている」
「マジですか」
「もう目で追いきれない速さで動いてんだけど」
「それでもゴブリンは普通に生きてるよな」
「いや!?でも、あれ見て！早くトドメ刺してくれって感じで目を瞑って棒立ちしてるのがいるわよ！」
「生きるの諦めてんじゃねえか！」
　それでもだ。幾ら首筋に手刀を放とうが身体が横に大回転するだけで大きい怪我は見当たらない。
「…見てるこっちが可哀想になってきた」
「「同感」」
　するとだ。肝心のアルフィアから息切れが聞こえてきた。そろそろ時間かな？
「アルフィア！休むか？」
「……あと1匹やったら」
「そうか！無理するなよ！」

因みに終わったのはそこから1時間後の事だった

◆◇◆◇◆◇◆

「えっと確かこんな風に！」

先程壁上で見た動きのマネをする。攻撃する動作は見えなかったが初期動作なら確認できた。

脱力状態からの瞬時の加速。それが教えてくれた技の1つだと僕は理解した。

「うわっと！」

勢いがつきすぎ身体のバランスが崩れる。だがモンスターはキチンと魔石に変わっていた。

「まだ来ますよ！」

「ッ!?わかった！」

「「おおー！」」

今回の探索で得たヴァリスは合計１２万ヴァリス。なかなかの好成績だ。

「やったね！リリ！」
「はい！ベル様！正直疲れはてた状態で来たものですから期待薄でしたけど、上から五番に入る額です！」
「あ…はは。まあ結構疲れてるのは事実だけどね」
　実際ヘトヘトなのは変わらない。だが普段の扱きに比べれば全然耐えられる方だ。
「いやーそれにしてもベル様もお強くなりましたよね、最初は頼りないな～と思っていたのが嘘みたいですよ」
「やっぱり…思ってた？」
「ええ！あのお三方を見てたらそれはもう！というかあそこで働きはじめてリリの生活は一変したと言ってもかごんではありませんから！」
!!確かあれはリリが働き始めの頃…
『?!?!』
『?!?!何か騒がしいですね』
　まだ開店時間では無いというのに何故か外が騒がしく感じました。とりあえずリリは服を着替えてお店の準備に戻ろうとホールに戻ろうとしたところ
『ちょ！ま、アルフィア君！落ち着いて！』
『いいぞ～！やれやれ！』

『エレボス！煽るな！ルドガー君も止めて！』
『アルフィアやっちまえ！』
『君もか！あ～～ザルド君！君は』
『店は壊すなよ』
『駄目か！』
なんとそこには顔面をボッコボコに腫らしたソーマ・ファミリアの一員がいました。
しかもアルフィア様が胸ぐらを掴み宙に浮かした状態で
何でも私が働いているという噂を嗅ぎ付けた彼らが金目的でお店と人を破壊しようとしたところ、逆にボッコボコにやられたという顛末でした。
その後お三方でソーマ・ファミリアを襲撃。酒を掻っ払い、まともな感性を持った人だけそのままにしている。みたいな三問芝居のような出来事がありました。
「まあお陰で現在はクリーンな感じでファミリアは再構成。リリも無事ヘスティア・ファミリアに所属出来たので万々歳ですけどね」
「あ…はは。まあリリが良いなら良いんだけど」
「はい！良いんです！」
そうです！あのファミリアには良い感じにお灸を据えたと思います！ざまあみろです！

「ところでこの後どうしますか？」
「予定は無いからお店に戻ろうかなって」
「それでしたらリリも」
「それじゃあ一緒に帰ろっか」
「はい！」
　そういえば皆様今頃何をしているのでしょうか。